

香川県埋蔵文化財調査年報

香川県教育委員会

目 次

昭和53年度における埋蔵文化財の調査	2
西方遺跡	5
羽佐島遺跡	10
長者原遺跡	14
真伏古墳	19
七五郎塚	26
森広遺跡Ⅱ	30
〃 Ⅲ	36
讃岐国府跡	41
西村遺跡	46
上母神第四号墳	51
尾ノ背寺跡	53
宝幢寺跡	56
勝賀城跡	60
昼寝城跡	65
すべつと窯跡	68
落合遺跡	73

53年度における埋蔵文化財の調査

昭和53年度における埋蔵文化財の発掘調査件数は19件である。そのうち本州四国連絡橋公団，建設省等との間で締結した発掘調査受託契約件数は4件，契約額の総額は1億27,032千円，それにかゝる遺跡数は，9遺跡となる。その他県教育委員会が主体となって実施した緊急発掘調査，重要遺跡確認調査等4件，市町が調査の主体となったが，県教育委員会が担当者を派遣して調査を指導したものが6件である。

さて今年度の発掘調査事業には従来の調査にはみられない幾つの特徴があげられる。

その1は道路建設，瀬戸大橋架橋工事等の大規模な土木工事に伴う事前調査の比重が大きくなっていることである。

このことは埋蔵文化財の発掘調査が，大規模な土木事業の工程に大きな影響力を与えるようになったことを意味し，文化財保護行政の果たす役割がそれだけ重要になったともいえよう。次に国府跡の発掘調査が継続的に実施される見通しがついたことである。讃岐国府跡は，坂出市府中町一带に比定され，従来断片的にそれを推測させるような遺物も出土しながら，本格的な発掘調査は実施されなかった。今年度は52年度の宅地造成に伴う事前調査の成果をもとに，国庫補助事業1件，県単独事業で実施した宅造に伴う緊急調査2件であるが，それぞれ成果をあげ，今後の調査の進め方についての見通しがついたといえよう。

特徴の他の1は，市町主体となる発掘調査が6件の多数にのぼったことである。このことは，従来発掘調査といえば，県教育委員会が主体となって実施するのが通例であるかのように考えられていたものであるが，それが次第に市町において，それぞれ能力に応じて事業を分担するというような傾向があらわれたこととして注目される。今後とも文化財保護行政の裾野を広げるという意味で，この方式はさらに推進されるべきである。

地図は国土地理院地形図を使用しました。

	区 分	名 称	所 在	備 考
受 託 調 査	海峡部埋蔵文化財発掘調査（瀬戸大橋建設に伴う）	<small>にししかた</small> 西方遺跡	坂出市与島	旧石器の包含地
		<small>わさしま</small> 羽佐島遺跡	〃 羽佐島	〃
	一般国道11号坂出丸亀バイパス埋蔵文化財発掘調査	<small>ちようじやばら</small> 長者原遺跡	〃 川津町	弥生式土器の包含層
		<small>まぶし</small> 真伏古墳	〃 西庄町	横穴式石室一基
〃	<small>しちごろう</small> 七五郎塚	〃 〃	経塚一基	
調 査	県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う発掘調査	<small>もりひろ</small> 森広遺跡（加藤地区）Ⅱ	寒川町石田東	弥生時代の集落
		森広遺跡Ⅲ		
調 査	県道府中琴南線道路特殊改良一種事業に伴う発掘調査	<small>さくら</small> <small>むみょう</small> 桜塚・無名塚	綾南町陶	中世墳墓
		<small>にしむら</small> 西村遺跡	〃	中世集落
緊 急	県教育委員会主体事業	<small>きぬきこくふ</small> 讃岐国府跡	1 坂出市府中町	
		〃	2	
		〃	3	
急 調 査	市町教育委員会主体（県担当者派遣事業）	<small>おのせでら</small> 尾ノ背寺跡	仲南町七箇	中世寺院跡
		<small>かみはがみ</small> 上母神古墳	観・木之郷町	横穴式石室一基
		<small>ほうどうじ</small> 宝幢寺跡	丸亀市郡家町	古代寺院跡
		<small>かつがじょう</small> 勝賀城跡	高松市香西町	中世山城
		<small>ひるねじょう</small> 昼寝城跡	長尾町前山	〃
		すべつと窯跡	綾南町陶	窯跡一基
	重要遺跡確認調査	<small>ながさきはな</small> 長崎鼻古墳	高松市屋島西町	前方後円墳の測量調査

文化行政課埋蔵文化財調査担当名簿

課長	沖吉和祐	昭和53年12月20日付 文化庁記念物課・課長補佐 教育次長・文化行政課課長 事務取り扱い
	石田薫	
課長補佐	斉藤嘉之	
副主幹	那須猛	
係長	松本豊胤	
文化財専門員	秋山忠	
主任技師	牟礼良典	
“	斉藤賢一	
技師	沢井静芳	
“	六車功	
“	渡部明夫	
“	寒川知治	
“	唐木裕志	
“	廣瀬常雄	
“	大山真充	
“	藤好史郎	
“	真鍋昌宏	
“	山本哲也	
臨時職員	玉城一枝	
“	川崎久美子	

埋蔵文化財発掘調査坂出連絡事務所

所長（囑託）	増田正伯
技師（囑託）	大砂古直生
“（”）	横田佳代子

西方遺跡

所在地 香川県坂出市与島町字西方

調査期間 昭和53年4月1日～昭和54年1月31日

調査担当者 牟礼良典，斉藤賢一，沢井静芳，六車 功，寒川知治，
唐木裕志，藤好史郎，真鍋昌宏，大砂古直生

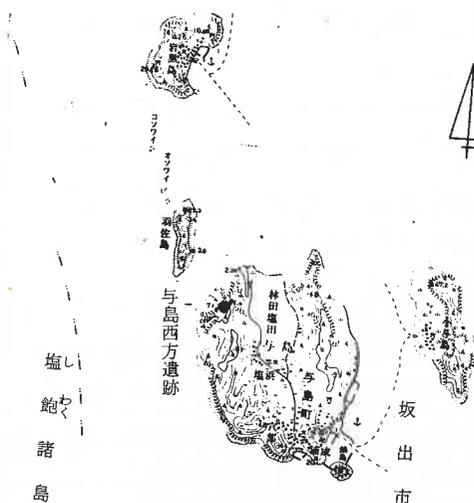
(1) 環境と立地

与島は坂出市番ノ州沖 3km程の海上に浮かぶ周囲約 4.2kmの小島である。ここは全島が花崗岩の表層地質（一部低地にあっては礫がち堆積層）をもち、現在はこれを利した石材の島である。この島には略南北方向に二筋の丘陵尾根が走っていて、各東方・西方と呼ばれている。今回の調査対象地域（A地区）は西方丘陵尾根の北端部に位置し、標高73.5mを最高所とする南北方向に伸びる帯状平坦部とそれに続く東側斜面部で、総発掘面積は 1,700 m²に及ぶ。

主たる調査対象年代である旧石器時代における瀬戸内海は、地質時代でいうウルム氷期前後頃にあたり、海面が現水位より 50～150 mも低下していたと言われている。仮りに、50mの低下と考えて海図を見ると、番ノ州北東沖にできる淡水湖を迂回するだけで、与島からサヌカイト原産地である国分台・金山（坂出市）までを徒歩により往来できることになる。（唐木）

(2) 調査の経過

香川県教育委員会は瀬戸大橋建設工事区域内における埋蔵文化財について、昭和51～52年度にわたり遺跡の概要・範囲の確認のため、与島・羽佐島・岩黒島・櫃石島において予備調査を実施した。今回の調査は、古くから旧石器時代の遺跡として周知の与島西方遺跡内で、とりわけ重要視されている石槌神社周辺区域で



与島西方遺跡

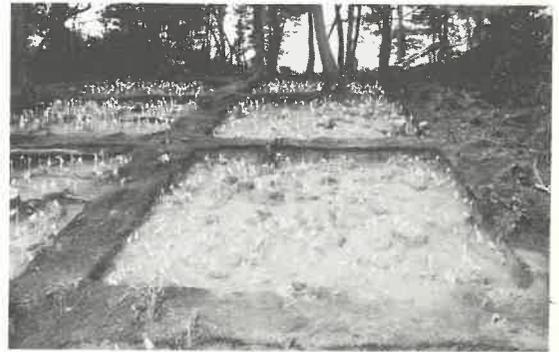


西方遺跡遠景（東方より望む）

全面発掘を行った本格的調査である。調査は、A地区に続き北東方向に下る複合傾斜を示すB地区で52年後半から数ヶ月を要し、A地区においては出土遺物が多く、遺構も検出されたため約10ヶ月の長期間続けられた。この間、調査の効果的運営のため、54年4月には「海峡部埋蔵文化財坂出連絡事務所」を設置し、同8月には「埋蔵文化財調査概報(I)与島西方遺跡」を刊行した。なお、膨大な遺物の整理作業は現在も継続して行っており、調査結果の詳細は本報告書で公表している。(牟礼)

(3) 遺物の出土状況

調査区画は、4m方格を原則とし、A地区においては尾根筋上で石槌神社の方向にa～tまで、それに直交する下り傾斜の方向に0～10までの区画を配した。また、土層序については、I～VIまでの共通土層番号を使用した。I層は腐植土層、II層は暗黄褐色砂質土層、III層は茶褐色砂質土層、IV層は茶白褐色砂質土層である。ただIII層とIV層は非常に類似していて、IV層が少し暗褐色の斑文が濃く、硬質であるという点で異なるだけである。V層は拳大の暗茶褐色の硬質ブロックを含むことを特徴とし、VI層は花崗岩盤及び風化によるバイラン土である。この基本的層序は調査区全域にわたって見られ、平坦部から斜面に変換しても、層序の逆転は認められない。こうした一定の堆積状況をなすうために、どのような自然的営力が作用したのか慎重に検討したが、結論は保留している。



遺物出土状況(A地区C列)

出土遺物の総数は14万余点にも及び、最多出土したf₂の調査区画はm²当たり350個を超えている。遺物分布を平面的に見ると、0～4列までの平坦部及び緩傾斜面に濃密で、a～tまでのうちでは、石槌神社に近いn～tでは極端に少い。一方、層別の出土密度は、I～V層上面までの包含層中、III～IV層で高い傾向を示す。しかし、各層の厚みを考慮すればI～IV層において殆んど平均的な出土率である。

出土した遺物で旧石器時代に係るものはI～V層上面にわたるが、縄文時代に属すると思われる石鏃や弥生時代の土器・石器はI～IV層までである。このことから、I～IV層は攪乱を受けた層であると考えられる。しかも、この攪乱は全調査区域において同一状態を示していることから、自然的状況の中で形成されたものであろう。逆に、IV層下部～V層上面には旧石器時代より後の遺物が混入していない為、原位置を保っているとは断定できないにしても、旧石器時代のある一時期における石器組成を表していると考えられそうである。以上のような出土状況からすると、V層上面は旧石器時代の一時期の生活面であり、V層以下は地山であることになる。今回の調査において、平坦部に近い所で、V層上面から掘り込まれている3個のピットを検出

した。詳細は次のとおりである。

d₀区ピット 直径30cm程の円形でVI層上面において初めて確認した。ピット上部には、小形ナイフ形石器を含むサヌカイト片が包含されており、下部には鶏卵大の花崗岩礫が混入していた。性格は不明。



d₃区ピット

g₂区ピット ピット下部において確認したが、推定では直径1.2mの円形を示す。このピットはサヌカイトの製品・剝片・破片を多く含んでいる。石器製作址を何らかの関連があると判断するには、なお今後十分な検討を要する。

h₃区ピット 直径1.5mほどの円形で両拳大の花崗岩礫が10個前後検出され、サヌカイト片が1点出土した。花崗岩礫には火による変質を受けたと思われる部分が認められるが、炭・灰が共伴出土していないため、炉址としての認定は、現段階ではできない。(真鍋)

(4) 出土遺物について

与島西方遺跡A地区出土の遺物を属する時代別にみると、旧石器時代・縄文時代・弥生時代及びその後の時代の遺物に大別できる。その内では旧石器時代に係るものが殆んどである。

(1) 旧石器時代の遺物として、ナイフ形石器・翼状剝片・翼状剝片石核・横長剝片・横長剝片石核・舟底形石器・スクレイパー・二次加工を施された剝片や剝片・碎片・叩き石が見られ、叩き石以外の大部分はサヌカイト製のものである。

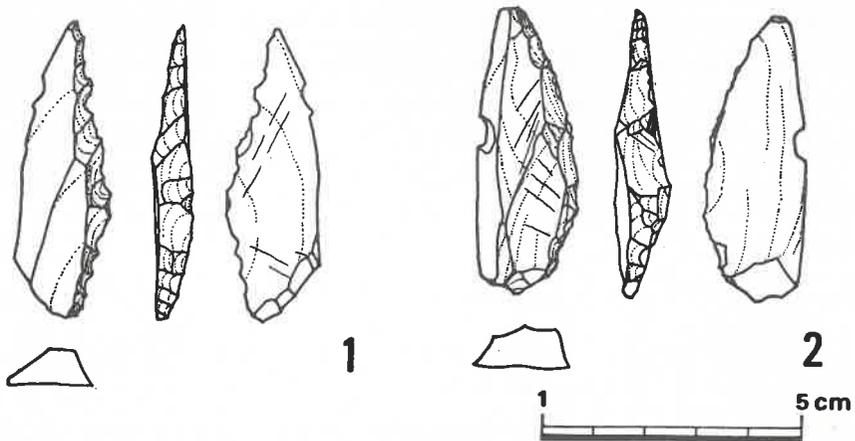
ナイフ形石器には種々の形態に分けられるが、殆んど横長剝片を利用したものである。翼状剝片を素材とし

た国府型ナイフ形石器(図1)

・背面にネガティブな剝離面を複数有するもの

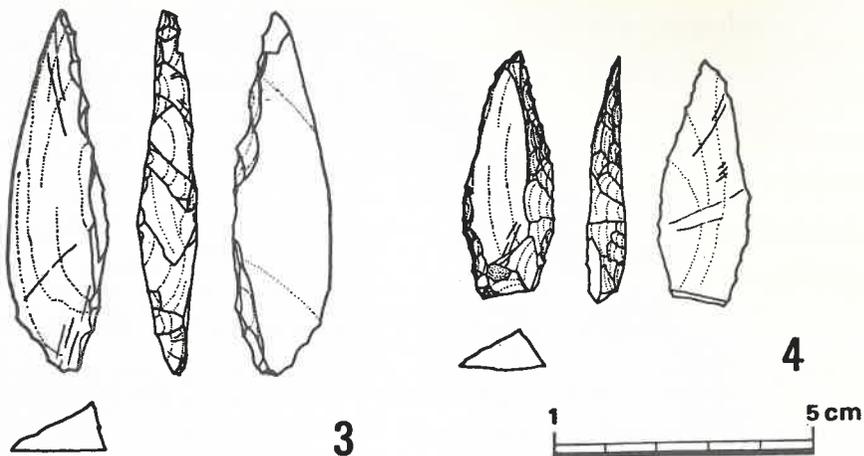
(図2)・断面が三角形を呈するもの(図3)

・打点部だけでなく刃部にも加工を施したもの



ナイフ形石器実測図

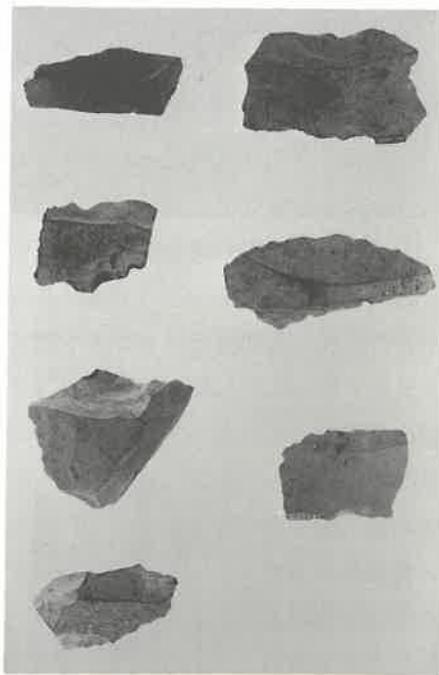
(図4)が主なタイプである。この他に、黒曜石・流紋岩片を用材としたものがあるが、いずれも縦長剥片を利用し切出し形に加工したものである。



ナイフ形石器実測図

翼状剥片石核は、翼状剥片を一方向からのみ剥離したものと、相対する側縁の両方向から剥離したものとに大別でき、出土した個体数は前者が多い。これら石核の翼状剥片を剥離したネガティブな面の大きさは、長さ3.7～7.2cm、打点から底面までは1.2～3.0cmの範囲にある。大きさからすれば、この範囲に含まれる横長剥片は翼状剥片であった可能性があり、小形のナイフ形石器でもこの翼状剥片を利用した可能性が考えられる。

縦長剥片には、長さ6cm、幅2cm前後のやや大形のものと、長さ3cm、幅0.5cm前後の小形のものに分類できる。この調査区では確実に細石核と認定できるものを検出していないが、羽佐島・櫃石島では出土している。このことから、A地区出土の小型縦長剥片でも細石刃の可能性もあると思われる。縦長剥片石核も2形態に分類できる。一つは、石核の幅と剥片の幅が一致するものであり、他は打面をめぐるように剥片を剥離したものである。



翼状剥片石核

叩き石は砂岩もしくは結晶片岩質のものであり、棒状の自然礫を用いている。端部ないしは側縁に使用痕と考えられる剥離痕が認められる。

(2) 旧石器時代より後代の遺物として、石鏃・弥生式土器片等のほか、少数であるが土師器片・須恵器片・貨幣（「神功開宝」）が出土している。

石鏃は、基部によって分類すると、凹基・平基・凸基に分けられる。石鏃の時代比定については、A地区出土の弥生式土器との共伴から考えて弥生時代以降のものと思えるが、与島の西方と東方に狭まれた平地部において縄文式土器が出土していることや石鏃の形態的特徴からして縄文時代の様相を有しているものもあることから、即断できない。また、ごく少数であるが「井島Ⅲ期」に編年されている、いわゆるロケット型をした石鏃が出土している。

弥生式土器は、殆んどが細片であり、A地区においてほぼ全面的に出土した。時期的な特徴を有するものにおいては、中期後半～後期初頭の年代が与えられる。器種としては、壺形土器・甕形土器・高坏などがある。（藤好）

(5) 遺跡の性格について

A地区は石槌神社の位置する尾根筋の高まりに近い所で遺物の出土密度は高い。また花崗岩のバイラン土の地山の二次的な堆積土層中から旧石器時代及びその後の時期の遺物が混在して出土した。

旧石器時代の遺物の中では、剝片・碎片類の割合が高く、石核や叩き石が存在することからこの地区において石器の製作が行われていたことは誤りないであろう。また多量に遺物が出土し、多くのタイプに分類できるナイフ形石器及び、細石刃と考えられる縦長剝片の存在などから、旧石器時代においてもかなり長期にわたり遺跡が存続していたことがうかがわれる。しかし、この高所は水的資源にあまり恵まれていないことなど居住するには適地とは考えられない。この地域は石器製作を第一義的な目的として営まれた遺跡の可能性もある。また弥生時代中期後半～後期初頭にかけての土器が出土しているが、遺構は確認できなかった。（藤好）



海上より調査区を望む

羽佐島遺跡

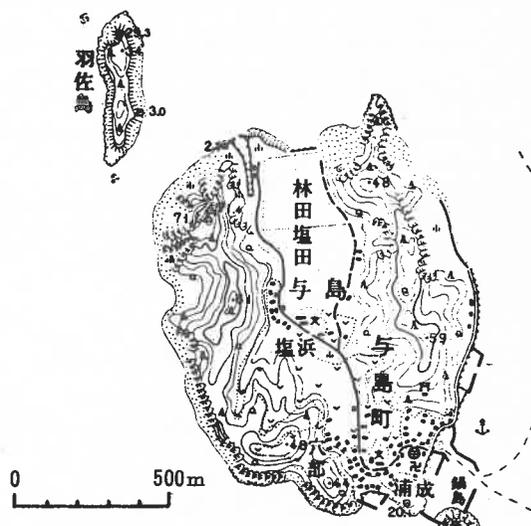
所在地 坂出市羽佐島

調査期間 昭和53年7月17日～昭和54年3月24日

調査担当者 牟礼良典・斉藤賢一・渡部明夫・唐木裕志・大山真充・
藤好史郎・山本哲也・大砂古直生

(1) 調査に至る経過 本州・四国連絡橋児島～坂出ルートにかかわる島々には、旧石器をはじめ縄文・弥生・古墳等各時代の遺跡が知られていた。しかし、その規模や内容についてはしっかりと把握がなされていないのが実情であった。そこで、昭和52年9・10月に羽佐島の予備調査が実施され、旧石器時代を主体とした遺物が丘陵部から広範に出土することが確められた。これに基づき、本州・四国連絡橋公団との間で受託契約が交わされ、昭和53年7月17日より羽佐島の本調査が開始された。

(2) 遺跡の概要 備讃瀬戸に浮かんだ多数の島々のうち、いわゆる塩飽七島の一つに数えられる羽佐島は、与島の北約200mに位置する無人島である。両島間の水深は20m程しかないため、かつては陸続きの地形であったことが想像される。島は南北に細長く周囲は約1.3kmを計る。その大部分は波に洗われて崖となっている。島は花崗岩を基盤とし、南北に二つの頂部をもつ丘陵からなる。北側の頂部は標高34mを計り、南側より約10m高い。島の中央部から北部にかけては戦後の一時期に畑作が行われたことがあり、また、採石を伴う小屋を建てるために削平された跡が中央の鞍部に残されている。



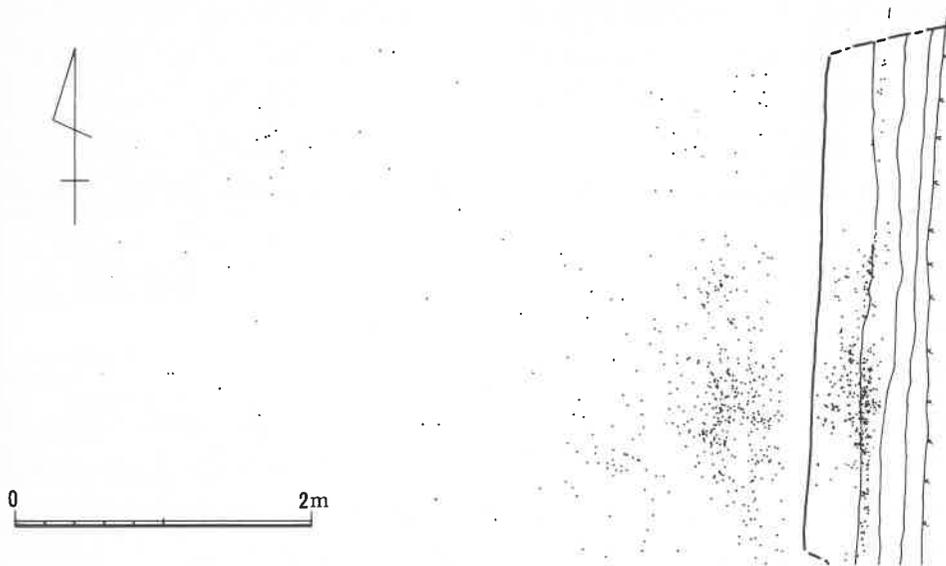
第1図 羽佐島の位置

調査は、島の中央部である鞍部を中心とした地域に実施された。調査地域は、地形から丘陵尾根（B区）・西側斜面（A区）・東側斜面（C区）とし、まず尾根部から調査に着手した。丘陵屋根上では2ヶ所に旧石器時代遺物の顕著な集中個所が確認できたほか、斜面部からも旧石器時代を中心とする多くの遺物が出土した。（斉藤）

(3) 遺構について 羽佐島遺跡においては、旧石器時代から近・現代に至る遺物が出土している。なかでも、旧石器時代に属する遺物が大半を占め、製品の器種もバラエティーに富んでいる。旧石器時代の遺物は、ほとんどがサヌカイト（讃岐石）を素材としている。島を形成する母岩は花崗岩であるので、これらサヌカイト製の遺物は、外部より当地点へ運びこまれたことは明らかである。出土する旧石器時代遺物は、膨大な量に達し、当地における旧石器時代人の長期にわたる生活活動を物語る。

現在のところ、旧石器時代の明確な遺構は検出されておらず、また、良好な文化層を示す土層序も明らかでない。けれども、遺物の平面的な分布状況からすれば、遺物散布の濃淡が認められる。とりわけ、南側頂部の北斜面と鞍部のやや北側の二箇所に、顕著な遺物集中箇所が存在する。こうした遺物散布状況が、当時の生活の跡を反映したものであることも考えられ、注目される。今後、遺物集中箇所の詳細な検討を行い、種々の問題点をふまえながら、羽佐島遺跡における旧石器時代の様相を捉えてゆきたい。

(4) 遺物の出土状況 羽佐島遺跡における土層の状態を述べると、基本的には、調査区域の南側で5層に、調査区域北側において6層に土層区分できる。とりわけ、南側の第IV層と、北側の第V層は、硬質ブロックを含む層であり、上層とは明確に区分できる。以下、羽佐島遺跡を南北に分割して、遺物出土状況を述べることにする。調査区南側では、表土から地山面までの厚さ約60cmであり、堆積層は極めて薄い。旧石器時代遺物は、表土層から第IV層までに含まれ、特に第I層から第II層にかけては、中世から近・現代に至る遺物の混在が著しい。第III層下半から第IV層においては、旧石器時代以外の遺物もみられるが、その数は少ない。第III層下半から、旧石器時代以外の遺物が、ほとんど出土しない場所もあった。

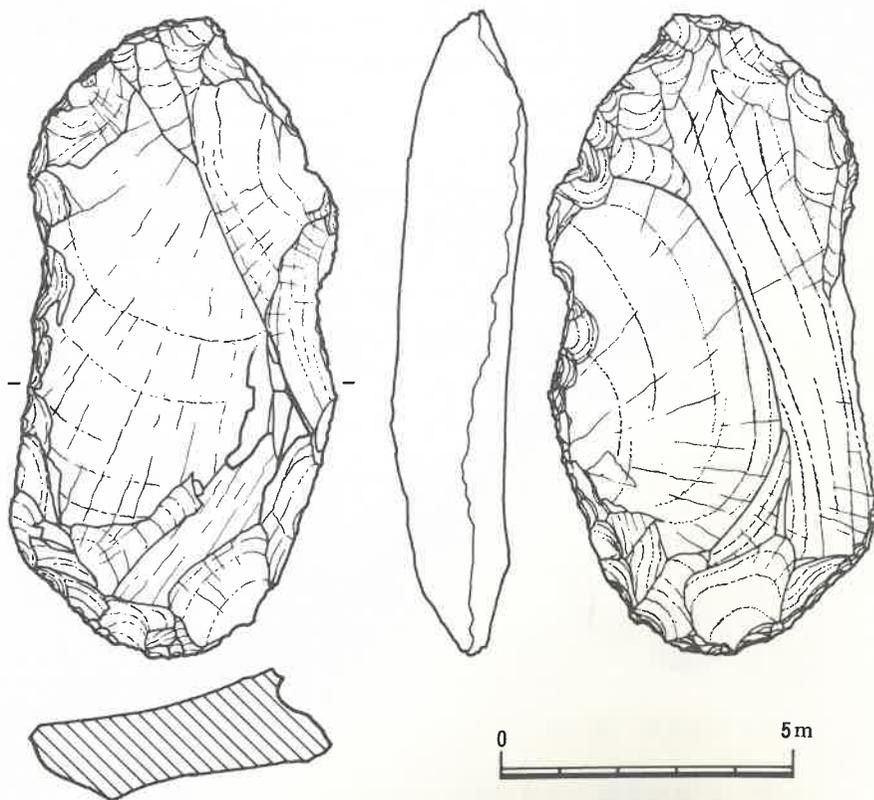


第2図 羽佐島B-20トレンチ遺物集中箇所(第3層下半以下・レベルは標高19.30m)

次に、調査区北側の遺物出土状況を述べる。調査区北側においては、南側にくらべ、堆積層は厚い。また、南側に対して、北側では、表土からは旧石器時代遺物が出土せず、第Ⅱ層から弥生時代～近世の遺物とともに出土する。細かく見れば、第Ⅱ層から第Ⅳ層上半にかけては、土師質小皿・土釜等に代表される中世期の遺物の混入が著しい。ただ、第Ⅳ層下半から第Ⅴ層にかけては、旧石器時代外の遺物の出土は、上層にくらべ極端に減少する。さて、先述した如く、羽佐島遺跡においては、明確な遺構が確認されておらず、然も単一時期の包含層の確認もなされていない。現在、第Ⅰ層～第Ⅳ・Ⅴ層の如く区分している層序も、厳密には各土層自体の質的相違からの分離であって、決して連続する文化層の区分ではないことを明記しておきたい。(山本)

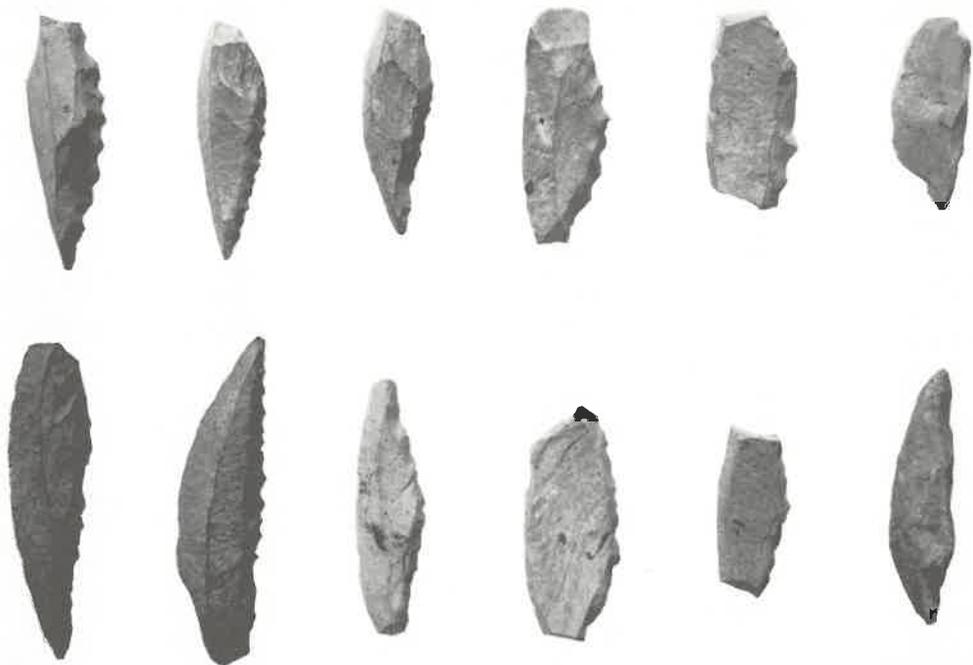
(5) 遺物 出土遺物の大半は旧石器時代のものであるが、ほかに石鏃・弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器・輸入磁器や、近・現代のものまである。旧石器時代以後の遺物のなかでは古代末～中世のものが多く、また、石鏃も少なくない。一方、確実に縄文式土器といえるものは出土していない。

旧石器時代の遺物は数万点に及び、ナイフ形石器・削器・斧形石器・石錐・截断面ある石器・舟底形石器・彫器(?)・スポール・尖頭器・翼状剝片・横長剝片・翼状剝片石核・横長剝片石核・円盤状石核・縦長剝片石核・細石



第3図 羽佐島出土・翼状剝片再利用の石器

刃・細石刃核・叩き石・石屑などがある。そのほとんどはサヌカイトを素材としているが、流紋岩と思われる石材を用いたナイフ形石器・翼状剝片石核・横長剝片・縦長剝片などが数十点あるほか、チャート製と思われる多面体の石核・黒曜石製の剝片も数点出土している。



第4図 羽佐島出土のナイフ形石器

ナイフ形石器には、背面に稜をもち、断面が台形をなすものが最も多く、断面が三角形をなすものがこれにつぐ。ほかに、いわゆる切出し形ナイフや、不定形のもの、小形のもの、縦長剥片を利用したナイフなどもある。ナイフのブランディングは、切出し形ナイフをのぞくと、腹面側から打面部全体に施すものがほとんどを占めるが、打面部の一部にしか施さないもの、腹面側と背面側の両方から施したもの、背面側から施したもの、先端部には刃部側にも施してポイント状に鋭く尖らせたものなどがある。なお、背面に稜をもち、断面台形をなすナイフは左右対称に近い典型的な国府型ナイフ形石器は少なく、一方の端部は尖り、一方は幅広く終るものが多い、斧状石器や石錐・彫器(?)・截断面ある石器・舟底形石器・スポールの出土は多くない。図は翼状剥片石核を再利用した削器と思われるが、あるいは斧状石器と呼べるかもしれない。尖頭器には、長さ3~4cmのものから、幅5cm以上、復元長15cm以上のものまである。

翼状剥片も多く出土したが、ナイフの素材となりうる横長剥片も少なくない。横長剥片石核には、典型的な翼状剥片石核から、一方の縁辺の表・裏にわたって剥片をとるもの、不定方向から剥片をとるもの、円盤状石核などがある。縦長剥片は、板状の剥片を石核とし、一端ないしは両端から打点を後退させながら連続してとっている。細石核にもこれと類似したものがある。細石核に用いられた石材は、ナイフなどのサヌカイトより緻密である。

叩き石には、一端または両端に小さな剝離があるものも多い。(渡部)

長者原遺跡

所在地：坂出市川津町峠字奥

調査期間：昭和53年7月8日～54年3月20日

担当者：沢井静芳・齊藤賢一・真鍋昌宏

(1) 調査の契機と経過

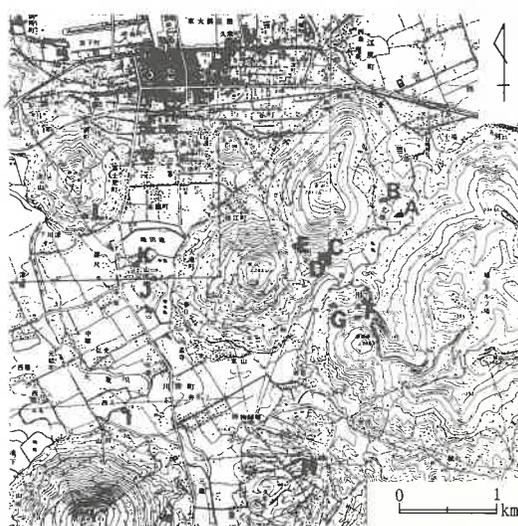
本遺跡一帯は石鏃・弥生式土器片の散布する包蔵地として知られており、弥生時代後期の住居址が想定されていた。坂出市の後背に位置する金山（海拔高281.0 m）の中腹斜面が、今回調査対象となった区域で、東・西の谷に挟まれた勾配の少ない（凡そ18°）緩斜面である。この斜面にかかるバイパス・ルートを網羅する形で調査区を設定した。

調査の前半期には表土より40cmの深さ（第4層上面）まで土器片・石製品など遺物が多く出土するにもかかわらず遺構は検出されなかった。上方からの流土作用による斜面の堆積状況を示すのみであった。後半期、斜面上方の調査に至り、遺構の存在を思わせる遺物の出土状況を見せた。そして、調査対象区の最高位にあたり、稜線にかかる調査区で、住居址が確認された。（沢井）

(2) 周辺の環境と立地

金山の東南に突出した台地（海拔高、凡そ100 m）から下に広がる一帯の緩傾斜面が俗称“長者原”^{ちやうじやばら}と呼ばれ、今回の調査を実施した長者原遺跡である。ルートにかかる調査対象区から上の台地まで凡そ20mを測る。

地図で見るとおり、金山の南に常山そして東には城山・郷師山と連峰をなし、これら相対する山々は城山と、金山の東に派生する尾根を結ぶ線を分水嶺として、その谷に谷水田を形成する。この谷筋は、阿讃山脈の洪積台地から始まり、川津町の西部を流れ、瀬戸内海に注ぐ大東

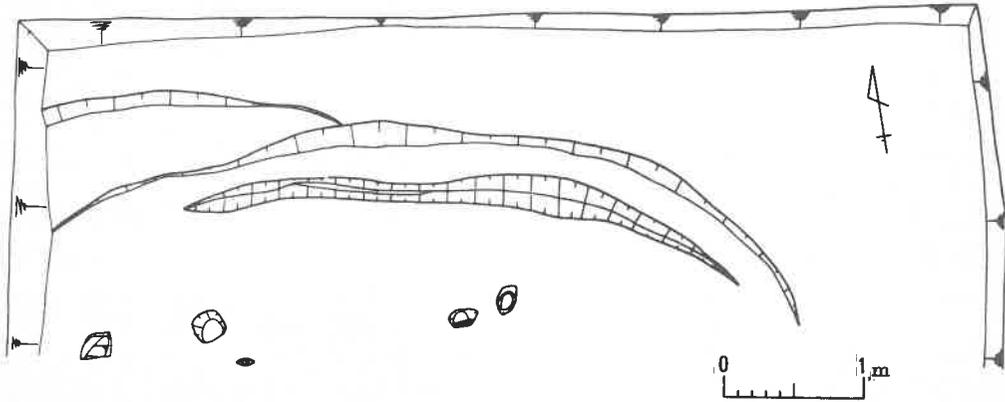


第1図 周辺の遺跡地図

図中記号	遺跡名	図中記号	遺跡名
A	爺ヶ松古墳	G	郷師山古墳
B	ハカリゴーロ古墳	H	向山古墳
C	長者原遺跡	I	西又遺跡
D	金山古墳	J	茶臼山古墳
E	ヒコシ峠遺跡	K	小山古墳
F	郷師山遺跡	L	下川津1号墳

川の一支流をなしている。本遺跡はちょうどこの谷水田を見下ろす位置に立地する。

(3) 遺構について



第2図 住居址平面図

住居址は、調査区の北東隅で確認され、全体の規模を知るためにA E 0区を設定し拡張した。斜面部に位置しており、その遺存部分が少なく、弓状を呈していた。弦の部分の長さは5.3m、弧の部分は、弦に対して直角に1.0mを測る。住居址全体を正円と仮定した場合の復元値は、径8.0m前後となり、遺存度は1割程となる。

住居址には、西側部分に、北側に張り出したテラス状の傾斜面があり、住居址内側の掘り方から0.3mのところ、掘り方と同心円状の溝状遺構がめぐる。幅は同一でないが、ほぼ中心では幅13cm、深さ5cm程である。部分的に逆台形状の断面を示すが、全体的にはV字溝となる。

柱穴は3個、他にそれと思われるもの1個が確認された。大きいもので径25cm、深さ9cmである。一穴からは詰石が確認された。全体的に、柱穴が2個づつかたまり、住居址北縁より存在する。なお、住居址西南部には、炭化物が集中していたことから、炉跡の位置もより限定できるものとする。(真鍋)

(4) 出土遺物について

1) 出土状況

各トレンチでの土層の堆積状況は、おおむね一致し、大別して5層よりなる。第一層は表土の腐植土層、第二層は旧耕作土(畑作)、第三層砂質土層、第四層粘質土層、第五層地山(花崗岩風化土)の各層である。

遺物は、第一層より第四層まで包含されるが、第三層より集中する傾向がみられる。全体的に包含層を形成しているわけで、数次にわたり遺物が流れこんだことがわかる。包含される土器は磨滅が著しく、細片となっているが、その出土数が多いことから、調査地点より上方の平坦部からの流れこみと判断された。土器については後述するが、単一型式であると判断される

ため、その資料的価値は高いと考える。(沢井)

2) 土器

包含層及び住居址内から多数の土器片が出土したが、図示できたものは6点を数えるのみである。図示している土器はすべて包含層中より出土したものであるが、調査時の所見では、包含層より出土した土器と住居址内出土の土器は同一型式である。器種は、壺・甕・高杯・鉢形土器に区分される。これらの特徴として、凹線文を多用すること、壺の内面は胴部下半にのみヘラ削りが施されていることなどがあげられる。

讃岐の様相が明確でない現在、あくまで推測であるが、判明している器種のほとんどが吉備の様相そのものであり、何ら変化が見られないことから、当時の讃岐は吉備色が強かったとすることができる。吉備の土器編年をもってすれば、従来より言われている「前山Ⅱ式」、城Ⅱ式土器^註であり、弥生時代中期後半の年代が与えられる。(真鍋)

註 「倉敷市(児島)城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(19)』岡山県教育委員会 1971.3

3) 石器

武器・農耕具など多種多様な石製品が400余点、出土した。土器の示す特徴から、弥生時代中期後半の遺構と考えているが、後期になると、多くの石器が姿を消してしまうことからすれば、異常に多い。製作技法も非常に粗雑で、旧石器のような規則性をもたない感じを呈する。

すべての遺物の実測、あるいは調査の成果の検討にもとづく詳細な報告は後日に待つことにして、ここでは代表的なものをピック・アップしてその特徴などを簡単に述べることにする。

a 石鏃

総数40点が出土したが、内完形品28、破片12である。すべてサヌカイトを材石とした打製品である。これらはまず一般的にされる平基無茎式、凹基無茎式(第3図1~3)、凸基無茎式(同5~6)、凸基有茎式(同7.8.11)の四分類が可能である。そして、もう一型式として基辺側に大剝離面を残し、その基辺は斜辺となるタイプに分類される。

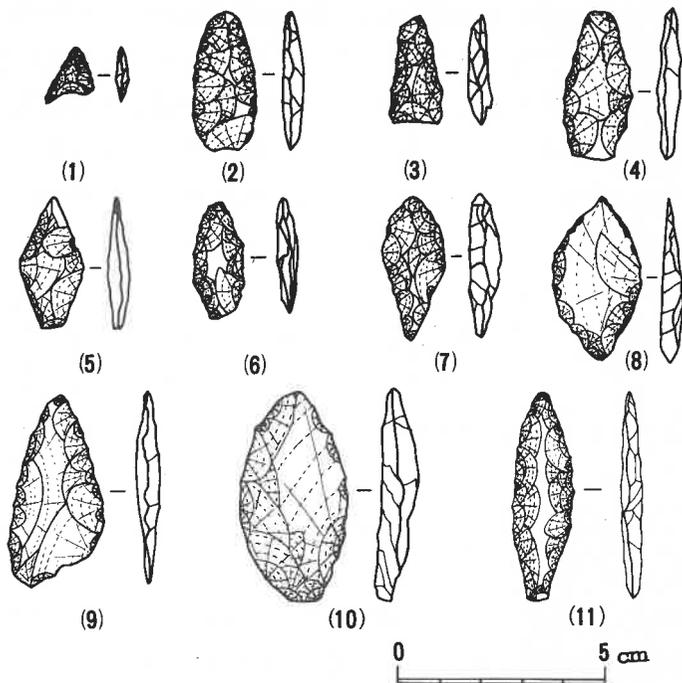
中部瀬戸内地域では、この時期、凹・平基式がその主体をなし、凸基式がこれにともなうとされる。本県においても水野正好氏の調査結果を引用すると、西部においては凹・平基式：凸基式=80：20(%)に対し、東部においてはこの割合が60：40となる。本遺跡の場合その比率は55：41となる。註 『紫雲出』 詫間町文化財保護委員会 1964

b 打製石庖丁

総数10点で、内完形品2、未製品2、他6点は破片である。消耗品としての性格をもつためか、完形品の点数が少ない。ほとんどが横長剝片をもちいてバルブ側の長辺を背とし、他の長辺を刃としてつくり、両短辺には紐かけのくりこみをつける。ただ1点だけが縦長剝片を使っ

ている。短辺のくりこみのある部分にバルブを残し、正面は2回の大剥離によりつくられ、末端部をフリー・フレーキングにより調整している。背面は一つの大剥離面が末端部までつづく。刃部は斜辺をなしている。くりこみをもつもの6、もたないもの2点である。くりこみの部分が極端に磨滅しているものはない。

石庖丁計測値の一覧表から理解されるように、幅5cm前後が平均的である。大陸・日本のいずれにおいても幅6cmをいちじるしくこえることはないという。厚さは未製品を含めて0.9cmの



第3図 石鏃実測図

ものが7点と圧倒的に多い。No.5, 6は小型品として区分される計測値を示す。

打製石庖丁は瀬戸内沿岸地域に多いが、その内でも香川県に特に多くその対岸である岡山県の南半部がこれにつぐ。香川県では坂出市の城山を中心とした地域で60%前後と、もっとも多く発見されている。

長者原遺跡出土石庖丁計測値 (単位: cm)

No.	長	幅	厚	特 徴
1		5.5	1.3	破 片 くりこみあり
2		4.7	0.9	" くりこみなし
3	8.5	5.2	1.3	未製品
4	10.0	5.0	0.9	完形品 くりこみなし
5	7.0	3.4	0.6	" くりこみあり
6		3.6	0.9	破 片 "
7		4.9	0.9	" "
8		4.8	0.9	" "
9		6.5	0.9	" "
10	16.8	7.0	0.9	未製品

c その他の石器

総数 400 余点の出土遺物と先述したが、石庖丁・石鏃など石器としての機能の明らかなもの

の点数は60点余にしか過ぎない。残りの300余点は、その機能は不明であるが明らかに加工の痕が見られるものである。剥片の一部分に調整を施して刃部をなすもの、石核様のものに調整剥離を施し石器としているもの、など多様である。これらの石器については石鏃・石庖丁など以上にその製作技法・機能などについて十分な検討を要するので、その考察については主なものとどめる。

第4図No.1 逆三角形を呈し、2斜辺はそれぞれ一方の側に調整を加え、刃部としている。底辺は礫面を残す。旧石器にみられるスクレイパーと同じ形態をもつ。

同 No.2 階段上剥離をした剥片にできた弧状の末端部に調整を施す。 (真鍋)

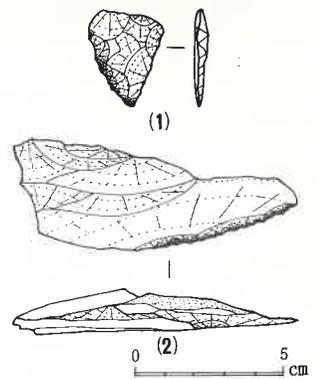
(5) 小 結

従来より遺物の採集が報告され、“長者原遺跡”として周知されていたこの遺跡で、初めての調査が実施された結果、住居址が一軒確認された。これにより、その上方に位置する尾根平坦部及びそれに続く緩傾斜面が遺跡の中心になるのではないかと判断され、遺跡の範囲をより限定できたことが、今回の調査の第一の成果である。

また、標高90m、尾根平坦部では100mの高所に位置し、東に城山、南に坂出方面に抜ける谷筋を、更に遠く綾歌の平野、讃岐山脈を望み、瀬戸内から丸亀平野へぬける交通の要衝に位置することで、いわゆる高地性集落に一例を加えることができた。

そして、中讃におけるこの弥生時代中期の土器の様相を把握しえたことは今後の研究にプラスとなる面が少なくないと思う。

以上の3点を今回の調査により得られた成果と考え、かつ今後の課題として、本報告でより詳細に検討を加えたい。 (沢井)



第4図 その他の石器

真 伏 古 墳

所在地 坂出市西庄町1595番地13

調査期間 昭和53年9月4日～同54年1月20日

調査担当 廣瀬常雄・六車 功

(1) 調査の目的

一般国道11号坂出・丸亀バイパス建設にともなう事前調査として実施し、約100日を要した。総発掘面積は約224㎡である。

(2) 遺跡の概要

真伏古墳は標高462mの城山西麓に位置しており坂出平野、瀬戸内海および、岡山県を一望できる傾斜地に所在している。城山には朝鮮式山城の城山山城があり、真伏古墳南上方にも「車道」と呼ばれる城郭外郭線が配されている。城山の西方にはサヌカイトを産出する金山が対峙しているが、両山がつくり出す谷筋にはこれまで後期古墳が知られておらず、真伏古墳南西約0.8キロに前期古墳の積石塚である爺が松古墳・ハリカゴロ古墳が位置するのみであった。

調査前の状況は、当地域がかつて果樹園に開墾されていたため、放棄された果樹と雑木・雑草が繁茂しており、真伏古墳の小規模な高まりと、その上に開墾時にあつめられたと思われる石の山が見られる傾斜地であった。

(3) 遺構について

○墳丘

調査の結果、真伏古墳は径約10.5mをはかる円墳であった。高さは古墳が傾斜地に立地するため均一ではなく、現高では下方より計測すると約1.8m、上方で計測すると0.35mとなる。ただし、墳丘の上半が石室天井石をふくめて削平されているため当然それより高いマウンドを築



1. 真伏古墳
2. ハカリゴロ古墳
3. 爺が松古墳
4. 金山古墳
5. 郷師山古墳
6. 割古1・2号墳
7. 弥栄神社1～7号墳
8. 白砂古墳
9. 山神古墳
10. 西山古墳
11. ダイバイ古墳
12. 弘法寺1号墳
13. 弘法寺2号墳
14. 弘法寺3号墳
15. 王塚古墳
16. 城山温泉古墳
17. 西福寺1～3号墳
18. 醍醐1～9号墳
19. 龍王宮1・2号墳
20. 醍醐城山1・2号墳
21. 別宮1～3号墳
22. 城山山城
23. 国府推定地

第1図 周辺の遺跡

造当時にはもっていたことになる。

地山面は約10度の勾配をもった傾斜面である。

墳丘の築成は地山には手を加えず、黄灰色粘質土と黒褐色粘質土の二層を基本とする数十層の土により、厚さ10cm程度を一層として互層に積みかさねている。

なお、盛り土の中には人頭大以上の大きさの安山岩（城山で産出する）がいたるところに埋めこまれており、葺石との区別にも注意を要した。

墳丘表面には葺石および、外護列石と考えられるものが見られる。墳丘西方では、長さ約5mにわたり基底部を画すると考えられる二～四段の石組みを、また東方には幅約1m、長さ約3mにわたり人頭大の石を用いた弧状を呈する石敷きをそれぞれ検出した。しかし、それらがおおむね墳丘基底部附近にみられることなどより考えて、基底部を画する石組み、石敷きと考えられなくもない。

外護列石と考えたものは羨道東側壁先端石に接して基底部をとりまくように約160cm弧状にのびた列石である。土層観察によるならば、封土より外に位置することになる。また、外護列石の向側、つまり対岸にあたる位置に古墳方向に向かって下ってくる石組みを幅約70cm、長さ約200cm、高さ約30cmにわたり検出した。墳丘基底部とこの石組みがつくる断面はゆるやかなU字形を呈することになり、古墳外域を示す施設の可能性がある。

○石室

主体部は南西方向に開口し、東側にのみ袖部をもつ片袖の横穴式石室であり、おおむね城山で産出する安山岩を木口積みをしている。石室上半が削平されており、天井石で原位置をたもっているものはない。石室規模は床面で計測すると玄室幅約200cm・同長さ約280cm、羨道幅約100cm・同長さ約350cmである。羨道には、人頭大以上の大きさの安山岩を差し渡し約100cmにわたって組み合せ、閉塞施設をつくっている。

玄室奥半部に拳大のサヌカイトを厚さ5cmほどに敷きつめていた。磔床のようなかたちを呈するのであるが、それにまじって西側壁寄りにのみ扁平な人頭大の石を約15cm間隔で三石配置している。つぎにサヌカイト石敷きを除去した段階でやはり扁平な人頭大の石が敷きつめられていた。その範囲は、ほぼサヌカイト石敷きと一致する。さらに、その下には石室中央を通過して外にのびる素掘りの排水溝が認められ、人頭大の扁平な石を蓋石として一列に並べている。

床面のレベルは一定せず、南・西両側にくらべて北・東、つまり奥壁と東壁が約10cm高い。

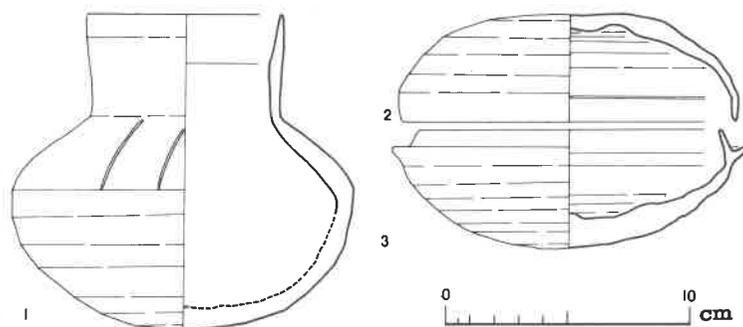
石室の築造は墳丘の築成と同時併行して行われたと考えられ、石室の基底石は築成途中の盛り土のある一面に置かれていた。

なお、羨道の東側壁は先端部方向になるにしたがってやや西の方向に彎曲している。

(4) 遺物について

出土位置の確認できるもののみで見ると、玄室内のサヌカイト石敷きの範囲内では土師器、装身具、鉄器を検出した。土師器、鉄器は細かく破損しており、とり上げるのにも困難を

要した。奥壁に接して数個体分の土師器を検出したが、器種は不明である。鉄器は破片となって散在している。装身具のうち銀環3個は、石室西側壁寄りにサヌカイト石敷き面上に配置されていた扁平な人頭大の石周辺で検出した。玉類はガラス小玉がいくらかの集中を示すほかは、原位置をたもった状態とは考えがたい。裘玉には琥珀製と埋木製が認められる。



第2図 石室出土土器

石室内のほかの遺物は大きく三つの群にわけられる。まず、袖部で須恵器杯蓋・同身、同提瓶、同壺、馬具、鉄鏃を検出した。馬具は鉄製であり、環状の鏡板、引手、銜からなる轡部で2セットが一括して出土した。鏡板に連結する方法は異なり、

一方は直接鏡板に引手・銜を装着しているが、他方は鏡板に環をつけ、その環に引手・銜を装着している。羨道玄門部寄りで須恵器杯蓋・同身、同高杯、同提瓶、土師器壺を検出した。他の一群は、羨道閉塞石寄りで検出した須恵器杯身、同短頸壺である。

須恵器は森 浩一氏編年の第Ⅲ型式中葉に相当するものを中心としている。

墳丘基底部より1~2m外側の4カ所に土器群が認められた。羨道先端西の一群より時計まわりに第1~4群とするが、第1群では須恵器杯蓋・同身、同高杯、同提瓶、同横瓶を第2群では須恵器杯蓋・同身、同横瓶、同甕を、第3群では須恵器甕、また第4群では須恵器甕をそれぞれ検出した。第2群では須恵器にまじり若干の土師器片を検出している。

これらの土器群は、穴を掘って据え置いたような状態ではなく、墳丘西側の緩傾斜面に位置していたが、各群ごとに器種が異なっていると考えられ、墳丘外祭祀の可能性がある。

土器型式は石室内の土器と同一である。

(5) おわりにかえて

遺物の移動・破損より見て、盗掘をうけているとも考えられるが盗掘坑は検出できなかった。石室上半は欠失しており、石室高は不明であるが、奥壁規模より考えて、現高に30~40cmを加算した120~130cm程度のもではなかろうか。墳丘の側面観を墳丘東部の葺石および、土層より想定するのならば、基底部周辺は幅1mほどの平坦に近い緩傾斜で、それより上方は急激に高く土盛りされた状態を復原できる。

真伏古墳は出土した須恵器の型式より6世紀後半以後に築造された古墳である。同時期の城山西麓の空白をうめる資料となったが、墳丘表面にみられた葺石状のものは、当地域が安山岩を多量に産出する地域であることより考えれば、単に石を墳丘表面や封土内に使用したともできるが、積石塚を想起させるものでもあり、時期を大きくへだてるにしても爺が松・ハカリゴ

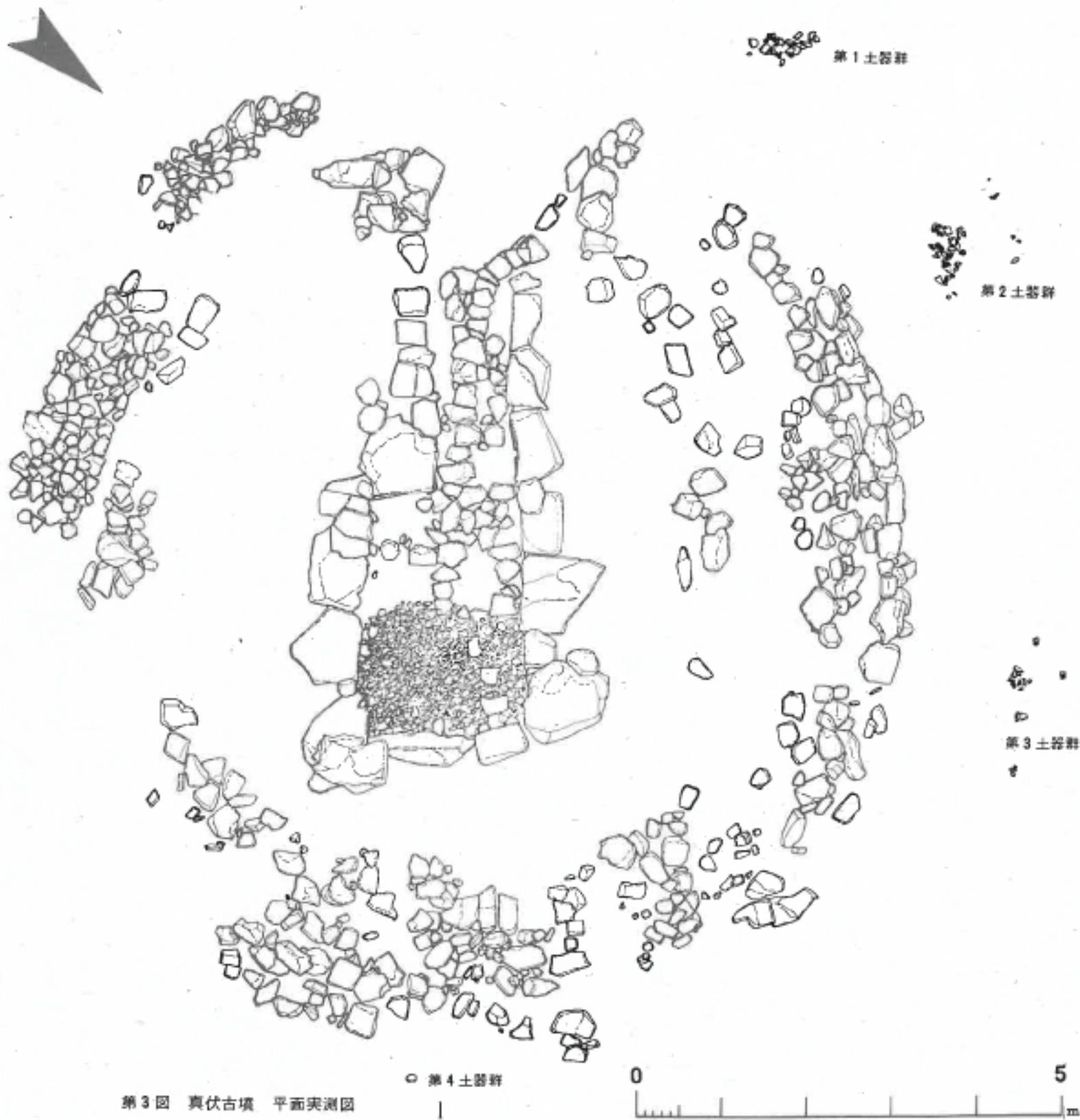
一〇両古墳の積石塚と関連さして考えると興味深い。

いずれにしても城山山麓には多数の後期古墳が分布し、東麓に相当する国庁推定地より城山をとりかこむように横穴式石室が開口しているが、時期的には真伏古墳と併行・後出するものが多い。讃岐の6, 7世紀を考える場合、国庁および、朝鮮式山城と後期古墳の関連は今後とも注意すべき問題をふくんでいる。(廣瀬)

註1. 森 浩一「後期古墳の討論を回顧して」(『古代学研究』30)1962.

附表1 出土遺物一覧表

		石室内の遺物	墳丘内の遺物	墳丘外の遺物
土	土師器 壺 鉢	1以上 1以上	破片(若干)	破片(多数)
	須恵器 杯身 杯蓋 高杯 提瓶 横瓶 短頸壺 壺 甕	4 4 1 3 1 1	 破片(若干)	5以上 5以上 2 1 2 3
装身具	銀環 琥珀製棗玉 埋木製棗玉 水晶製切子玉 水晶製算盤玉 碧玉製管玉 銀製空玉 ガラス小玉(小) " (大) ガラス丸玉 不明玉	7 9 3 1 1 2 7 89 3 1 3		
鉄器	劍 鉄鏃 刀子(?) 馬具(轡部)	1以上 14以上 2以上 2組		
石器	石鏃		1	
その他	寛永通宝			1



第3回 真伏古墳 平面実測図



真伏古墳閉塞石
(玄室側より)



真伏古墳石室全景(北より)

七五郎塚

所在地 坂出市西庄町字樋本

期 間 昭和53年6月5日～6月15日

担当者 齊藤賢一 沢井静芳

- | | |
|----------|----------|
| 1. 七五郎塚 | 7 鷺ノ口古墳群 |
| 2 別宮古墳群 | 8 山ノ神古墳群 |
| 3 醍醐寺塔跡 | 9 国府跡 |
| 4 醍醐古墳群 | 10 開法寺塔跡 |
| 5 鴨麿寺跡 | 11 妙楽寺跡 |
| 6 鴻ノ池古墳群 | 12 安楽寺跡 |



第1図 周辺の遺跡

(1) はじめに

七五郎塚は、調査前の所見では径約3m、高さ0.6mの小円墳を呈し、地元では孝子七五郎の墓とされていた。

発掘調査は墳丘及びその周辺部について実施した。

(2) 遺跡の概要

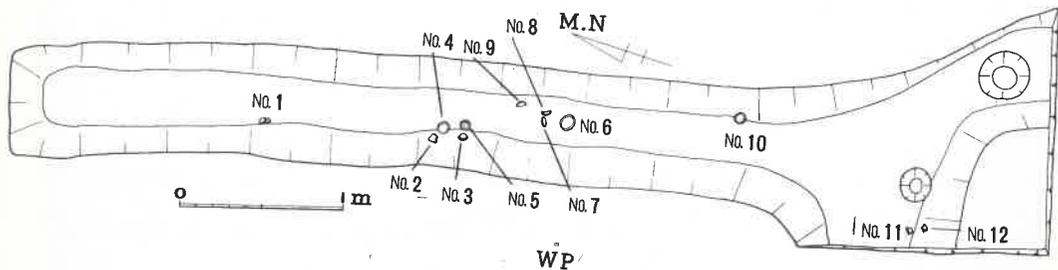
遺跡の所在する坂出市西庄町は、城山と白峰の間を縫って瀬戸内に注ぐ綾川によって形成された沖積平野にある。塚は、城山寄りの土地、いわば城山の山麓に接して位置する標高約5mの水田中に所在した。西庄のすぐ北西にある江尻・新田等の地名は、この辺りが近世になって開墾された土地であることを物語っている。しかし、すぐ東にある綾川との関係からみると、塚の所在する水田は明らかにその氾濫原であったと考えられる。また、塚をとりまく周辺部には多数の遺跡が分布する。とりわけ、綾川の流域には醍醐・別宮・山ノ神・鴻ノ池・鷺ノ口などの古墳群をはじめ、醍醐寺塔跡・鴨麿寺跡・開法寺塔跡などの古代寺院跡が知られている。また、古代に於ける讃岐国の中枢ともいべき国府跡も当該遺跡から少し綾川を遡ったところ

にあり、この辺りが古代より開けたところであることをよく示している。

七五郎塚の名は孝子七五郎に由来する。「全譜史」によれば、七五郎は綾北西荘の人で、父を亡くして後奴僕となって母と姉に孝を尽くしたことにより、寛保二年(1742年)に高松藩主より穀四斛を賜わっている。

(3) 遺構について

調査は、塚を中心に1辺6mの方形のグリッドと、東西南北に幅1.5m、長さ2mのトレンチを設定した。塚の規模は、直径約3m、高さ0.6mのやや楕円形のあまり大きくないものである。マウンドはほぼ半球状であるが、縁辺は耕作によって削り取られた為か不自然に垂直を呈していた。また、マウンド表面には、周辺の水田から出土したと思われる土器片や小礫片が散在し、中央には外部標識としてサヌカイトの礫が置かれていた。盛土はほぼ4層に区分することができたが、整然とした土層序を呈するものではなかった。これは後世の盗掘によるものと思われるが、経筒外容器の出土状況及び位置からみても明らかである。盛土の最下層は版築と考えられるが、細分すると二層に分けられる。先ず上の層は、色・成分は下の層とほぼ同質であるが、やや砂質気味でやわらかい。これは、下の層が削られて再び盛られたことによるものである。下の層はいわゆる版築で、粘土に土器片を砕いて混入し突き固めたしっかりしたものである。断面台形状を呈す。石組は先ずこの版築上に経筒外容器を伴って検出された。石組を構成する石は、城山を原産地とすると思われる安山岩で、大きさは握り拳大のものから径40~50cm程度のもまで多様であった。配石に明確な規則性は見られなかったが、攪乱を受けたことを考え合わせると理解できる。石は2段ないし3段に積まれていたが、西よりも東が厚く、東から西に押し流された感を呈して検出された。マウンドの重心位置との対比から考えてみると、やや東寄りに偏在する。東寄りの厚く積まれた石は版築を突き抜け、地山に掘り込まれた2つの土壇に配された石組みにつながっていた。土層序と、この土壇内に見られた土質が先に述べた版築の上の層に比定できるものであることから、やはり攪乱を受けていることが明らかとなった。マウンド内の遺構は以上であるが、マウンド外に於いてこれに関連すると思われる遺構が検出された。先ず東側部分には、塚を取りまく形で極く浅い溝が検出された。これ



第2図 溝状遺構実測図

は、マウンドがやや楕円形を呈すること、石組みが東に偏在することから考え合わせ、東側部分が削平された可能性を示す。そして、西側には塚を中心に幅 1.4m長さ13m深さ15cmの南北に走る溝状遺構が検出されているが意味は明らかでない。

(4) 遺物の出土状況

盛り土第1層～第3層中より出土した遺物は大半が小さな破片であり、接合資料も皆無と言ってよく、原型や原位置を確認できるものはほとんどなかった。経筒外容器についても、接合した1個体分は石組み中より集中的に出土したが、原位置とは認定し難い。また、別個体の経筒外容器片と思われるものは西寄りの版築上より出土している。盛り土中からは、この他打製石庖丁・青磁片・土鍋の脚・須恵器片・土師質土器片等多数が出土している。青磁片は、盛り土第3層より1点、版築中より4点が出土している。塚の西に検出された溝状遺構中より土師質の小皿が8点出土している。塚の真西に集中し、廃棄された状態で出土したことが注目される。須恵器片が伴出したが、これは耕作時の攪乱によって流入したものと思われる。

(5) 主たる遺物

番号	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	焼成	胎土	色調	切り離し		備考	
							ヘラ	糸		
1	土師質小皿	1.6	8.0	普通	精製土 微砂粒を含む	内外 赤茶色 灰黄色	回転		溝Na 2	
2	"	1.2	8.2	"	"	内外 赤褐色 灰赤褐色	"		溝Na 4	
3	"	1.4	8.3	良好	精製土	灰白色	"		溝Na 5	
4	"	1.2	8.7	"	"	黄赤褐色	"		溝Na 6	
5	"	1.1	7.8	普通	精製土 3.5mm×1.5mmの砂粒	灰黄白色	"		溝Na 7 口縁部磨滅	
6	"	1.6	8.0	"	精製土	内外 淡黄褐色 明赤褐色	"		溝Na 8, 9 口縁部欠損	
7	"	1.4	8.3	良好	精製土 微砂粒を含む	淡黄白色	"		溝Na 10	
8	土師質小皿	0.8	6.4	普通	精製土	黄茶色	回転			
9	"	0.9	6.0	良好	"	茶褐色	"		底部外側にタ タキ目	
10	"	1.7	7.7	普通	"	淡黄茶色	"			
11	土師質土器底部	?	?	"	"	"	"			
12	土師質小皿	?	?	"	"	淡黄茶色	回転			
13	土師質椀	3.8	13.5	"	"	"	○			
14	青磁碗 (e)	?	14.0	クシ描きによる文様(劃花文)の上に暗灰緑色の釉がかかっている。						
15	" (a)	?	15.7	暗灰緑色の釉, 文様なし。						
16	" (b)	?	11.0	淡灰緑色の釉, 口縁端部より約3.5cmのところで釉がきれている。						
17	" (d)	?	?	高台部分には釉が及んでいない, 淡灰緑色の釉。						
18	経筒外容器	16.8	13.5	普通	精製土 砂粒を含む	黄茶色			粘土ヒモ輪積 み手捏ね	
19	打製石庖丁	サヌカイト製, 礫面を残す大型剝片を利用								

1～7は溝, 8～19はマウンド内より出土

第3図 遺物一覧表

(6) 遺跡の性格

盛り土や版築上の石組みには盗掘を受けた跡が顕著である。しかし、版築の中でも堅牢な下の層とそれに含まれた土壇中の石組みは原位置を保っていると思われる。2個体の経筒片の出土と2つの土壇を結びつけるのは余りに短絡的であるが、その可能性は大である。マウンドの東に検出された浅い溝と石組みの東への偏在は、耕作により削られたためか盗掘によるものか確認できなかった点、塚の西に検出された溝状遺構及びその中から出土した土師質小皿の関係が不明であるが祭祀的な関係が考えられる点。こうしたいくつかの問題点が考えられるが、七五郎塚は、出土遺物から、中世後半に築造されその後盗掘を受けた経塚と見ることができであろう。(斉藤)

森 広 遺 跡 II

所在地 香川県大川郡寒川町石田甲加藤
調査期間 昭和53年5月8日～8月31日
調査担当 廣瀬常雄, 山本哲也

(1) 調査にいたる経過

森広地区をふくめた寒川町の主要部を東西につらめく県道バイパスと香川用水東部幹線水路の建設が計画された。その工事实施に先立って昭和46年度に行われた分布調査の結果をもとに、昭和52年度より布勢地区の発掘調査を実施したが、調査期間中に新たに森広遺跡内の加藤地区で多量の土器の出土をみた。急きょ同年10月より加藤地区第1次調査を行い、ついで53年5月より第2次調査を開始した。本書は第2次調査概要である。

(2) 遺跡の概要

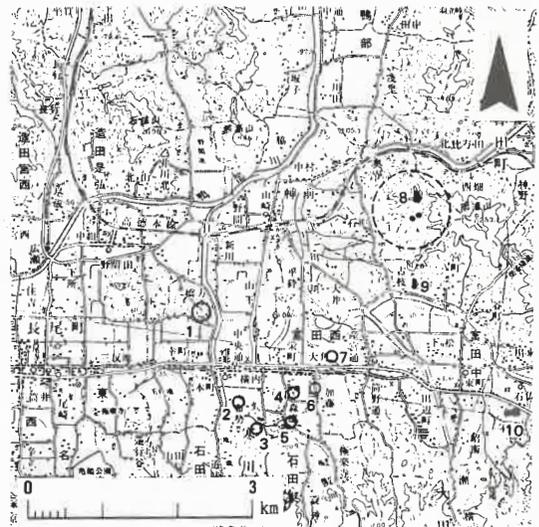
矢筈山・女体山などの一連の山塊から北方向にのびた尾根の山麓、微高地に遺跡群が分布している。主なものは第1図に示したが、そのうち、3で銅剣、5で巴形銅器の出土を聞く。しかし、いずれも報告書が未刊であるため詳細は不明であるが、そのうち地蔵川東岸の布勢遺跡では確実な弥生時代の遺構は見られず、古墳時代後期の溝を検出している。遺跡群東方では加藤地区第1次調査で弥生時代後期の竪穴式住居を中心とした遺構群が検出されている。

第2次調査地区は第1次調査地区の西側隣接地にあたり、現在は水田化されているが、おおむね海拔37～39mの尾根筋微高地の西傾斜面に相当する。

(3) 遺構について

○ 8・9区

土層は耕作土と一枚の粘質土層をのぞいて、いずれも砂質層であった。地表下約50cmは近世以後の耕作・攪乱をうけており、その下約30cmは洪水・土砂ずれなどによる砂層が数層にわ



- 1 天王山遺跡
- 2 布勢遺跡
- 3 石田八幡遺跡
- 4 石田高校校庭内遺跡
- 5 森広遺跡
- 6 加藤遺跡
- 7 寺田大角遺跡
- 8 雨滝山墳墓群
- 9 古枝古墳
- 10 茶臼山古墳

第1図 周辺の遺跡

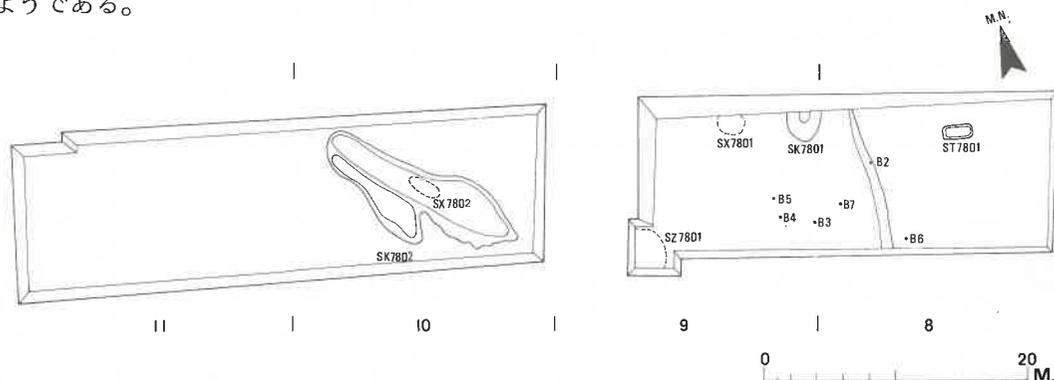
たって堆積する（上部砂層）。その下層に厚さ約20~30cmの暗褐色粘質土層があり，比較的濃密な遺物包含層であった。遺物は後期弥生土器から須恵器までを包含していた。さらにその下に砂層（下部砂層）が厚さ約100cmほどにわたって堆積し，数層に細分できる。遺構と考えられるものは下部砂層で検出した。

遺構面は，東から西に向ってなだらかに傾斜しており，東西両端で約100cmの比高差がある。ただし，8・9両区の境付近で約30cm急激におちている。検出した遺構は，土塚墓1（S T 7801），落ち込み1（S K 7801），不明遺構1（S Z 7801），土器溜り1（S X 7801）である。S T 7801は長さ約270cm，幅約90cm，深さ約30cmの規模で検出した。ゆるやかな落ちかたを呈し，断面はU字形に近い。底部穿孔の壺一点のみを副葬しており，床面より約25cm上で検出した。S Z 7801はトレンチ隅で検出したため完掘できなかったが，ほぼ直径200cmで土器が集中し，土器に接して下に人頭大の河原石を敷いている。土器は大半が完形品である。

○10・11区

土層は暗褐色粘質土が9区より10区に若干のびてくる以外はいずれも砂層である。10区ではほぼ南から北にのびる大型の落ち込み（S K 7802）を検出した。長さ約16m，幅約4m，深さ約0.3mである。人為的なものとは考え難く，自然の土砂流入の結果，形成されたものと考えた方がよさそうである。ただし，東辺のほぼ中央に長さ約1.5m，幅約0.5mの範囲で拳大の礫にまじって多量の土器を検出している（S X 7802）。

11区は全域で砂礫層がみられ，遺構は全く検出できなかった。自然の土砂堆積と考えていいようである。



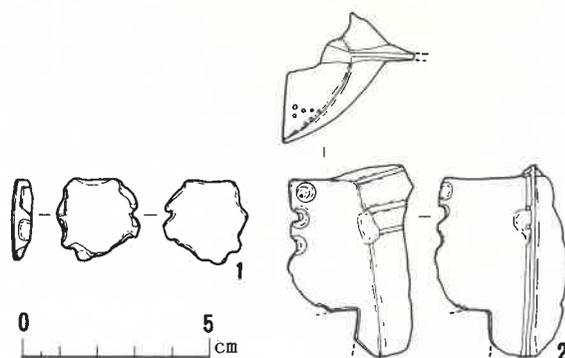
第2図 遺構配置図

(4) 遺物について

8・9区の境で緩傾斜面が西側に急激におち込むが，その付近で7点の青銅片を検出した。10×7mの範囲で遺構をとまわずに包含されており，土層は下部砂層のうちの上層に相当する。最大のもので長さ約5cmをはかり，舞・鱗・型持孔をもった銅鐸身肩部の破片である（第3図-2，B-4）。鱗上端には鋳上りの不良な三本の凸帯，飾耳と思われる痕跡がある。鐸身上縁には鋳かけに利用したと思われる直径約0.5cmの孔が三孔外側面よりうがたれている。

近接する辺は本来の面を残しており、上段の一孔が丸く完結するのに対し、他の二孔は三日月形に穿孔されている。舞の部分には鋭利な道具でおさえつけたような径0.1cm以下の窪みが数カ所にみられる。鈕は根本より欠損している。

銅鐸5（第3図-1，B-5）は約2cm四方大の破片である。各辺が本来の面を残しており，B-4の鑄かけの部分と接合した。



第3図 銅鐸片実測図

銅鐸6（図版第3，B-6）に円形を呈する孔が認められる。B-4，B-5に見られた孔と同じように鑄かけを行う場合にうがたれた孔と思われる。

その他の4点の青銅片は、いずれも小片ではあるが前記の青銅片と同様に銅鐸の破片と考えておきたい。

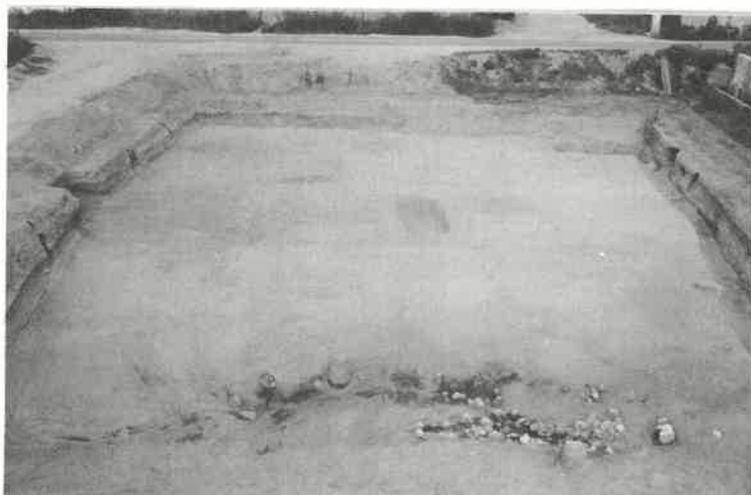
(5) まとめにかえて

第1次調査で検出した住居跡群の西端の一棟より約10m西側が第2次調査地区であるが，2次調査では一棟の住居跡も検出できなかった。両調査の結果における遺構・遺物・土層序の各点で相違することがあり，現在整理中である。第1次調査対象地区がある種の尾根筋に相当し，2次調査がその西傾斜地にあたるため，2次調査は集落のはしを検出した可能性がある。

銅鐸は小型の袈裟襷文銅鐸と推定しているが，いずれも包含層の遺物である。伴出土器は後期弥生土器より土師器にいたる。ただし，包含層の下層で検出したS Z7801の土器は土師器である。（廣瀬）



1 発掘区全景（東より）



2 8区全景（西より）



3 10, 11区全景（東より）



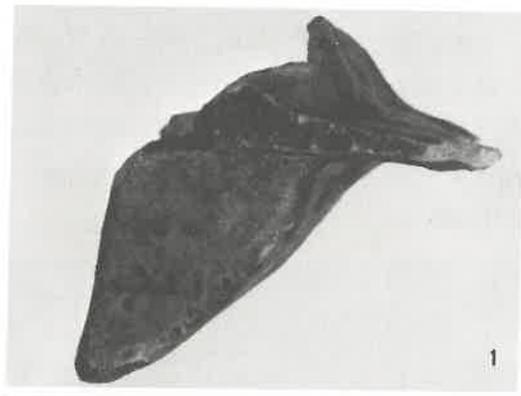
1 ST7801



2 SZ7801



3 SZ7801



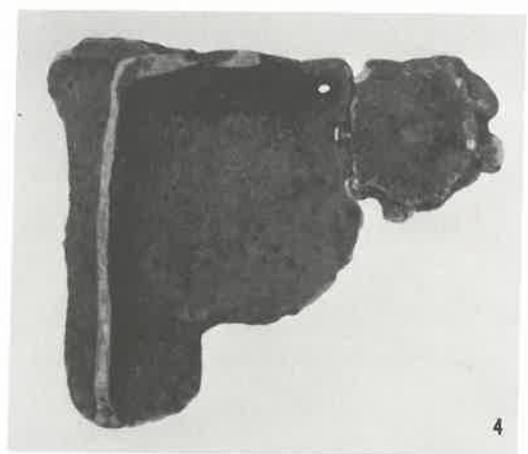
1



3



2



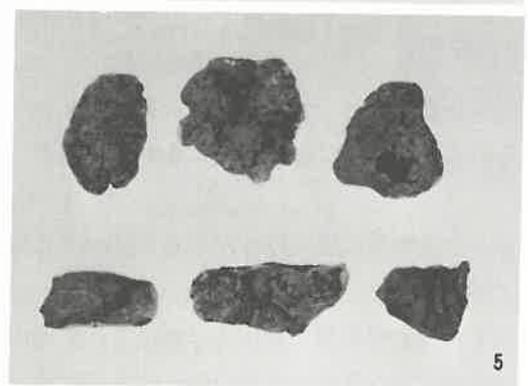
4

↑ B-4 と B-5

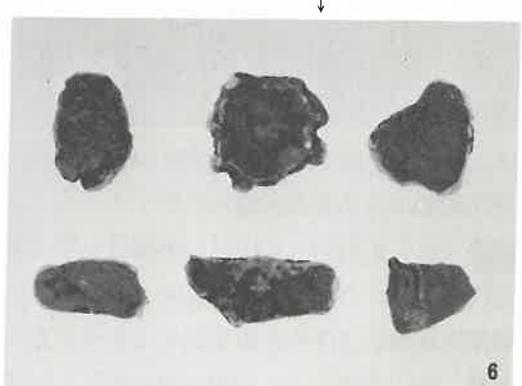
← B-4

B-6 B-5 B-7
B-3 B-2 B-1

↓



5



6

森 広 遺 跡 Ⅲ

所在地 大川郡寒川町石田東

調査期間 昭和53年11月17日～昭和54年3月31日

調査担当者 六車 功・寒川知治

(1) 調査の経過

森広遺跡は^{もりのひろ}県道高松・長尾・大内線建設にさきんじて緊急発掘調査が行われた。元来、森広遺跡の名称は、明治44年5月、巴型銅器8点を出土した森広弥生遺跡、昭和44年7月、多数の弥生時代後期末の土器と共に住居跡が発掘された石田高校校庭内遺跡、昭和52年夏の調査で中世のピットや県下初の高床式建築跡（古墳時代）が発掘された布勢遺跡、同年11月から翌年8月の調査で弥生時代後期末の集落跡や銅鐸片が発掘された加藤遺跡など、大川郡寒川町石田東に所在する遺跡群の総称として用いられているが、ここでは石田高校校庭内遺跡のうち、今回の調査にかかる旧実習農園内に限定する。



森広遺跡(Ⅲ)位置図

1:25000

調査区は昭和44年の調査や昭和51年末の予備調査の結果をもとに総延長160m、幅19mの道路予定地内に原則として東西長20m、南北幅3～14mの9区画を設定した。

調査は順調に進み、ピット群、溝、住居跡、土堀などの遺構とそれに伴う弥生時代後期末から中世にかけての遺物を多数発掘した。

(2) 遺跡の概要

森広遺跡は、南にそびえる讃岐山脈から流れ出る梅檀川（せんだんがわ）によって形成された標高約35mの沖積微高地に立地する。

遺跡は地表下約50cmに中世の土師質土器を主体とした遺物包含層を持ち、さらに50cm下に弥生時代後期末から平安時代後期に至る遺構を持った複合遺跡といえる。

梅檀川は森広遺跡の西限を画するように北へ流れて大川町平碎橋で津田川に合流し、岩崎山古墳群、赤山古墳、そして積石塚の鶺部山古墳など前期古墳が集中する津田湾へ注いでいる。

また、周辺には、すでに紹介した遺跡群のほか、弥生時代後期の墳墓群として知られる大井

遺跡、弥生時代後期から古墳時代の墳墓、古墳の多い雨瀧山遺跡、東には仁徳天皇陵タイプに区分され四国最大を誇る前方後円墳の富田茶臼山古墳がある。古墳時代後期の遺跡としては大末古墳群、葺神古墳群、極楽寺古墳群が、仏教の伝播とともに極楽寺や石井廃寺が、中世には安富氏の雨瀧城や石田城、細川氏の国弘城など、弥生時代後期から中世に至る多くの遺跡が知られている。

森広遺跡はこうした遺跡群の中心にあって大変重要な位置を占めている。

(3) 遺構について



① 第Ⅲ調査区SD7801, 遺物の出土状況



② 第Ⅵ調査区遺構の検出作業手前がSB1, 後方がSB2



③ 第Ⅶ調査区SP7801, 遺物の出土状況

今回の発掘調査では、溝、住居跡、土坑、ピット群などの遺構がたくさん遺物を伴って検出されている。

ここではこのうち性格の明らかになったものについて述べることにしたい。その際、遺構名は調査時に使用していた仮称名を用い調査状況は写真などを参照されたい。

第Ⅲ調査区SD7801

略南北方向にのびる溝状遺構で、検出しただけでも長さ10mを測る。幅は南壁付近で80cm、検出しえた深さは約20cm、調査区中央部から北壁にかけては幅が150cmに拡がり、オール状を

呈する。北壁付近での深さは約30cmを測り、南から北へゆるやかに傾斜する。遺物は写真①のように北半部に集中し、炭や灰、熱を沿びて赤く焼けた石などとともに検出された。

主として土師質土器（甕、鉢、皿、盤、甑など従来の素地のもののほか、内面に炭素を吸着させた黒色土器や朱塗りのものもある）、須恵器（壺、甕、坏身、坏蓋、高杯、罎、皿など器種も多いが不良品も少なくなかった。）でいずれも平安時代初頭のものと考えられる。

第VI調査区SB1

直径約6mの略円形住居跡で高さ約10～20cmのベッド状遺構を伴う。中央よりやや西寄りには径約50cmのピットがあり、口径17cm器高30cmの完形の壺1個が出土した。またこのほかにも弥生時代後期末の土器が多数出土している。

第VI調査区SB2

東西長5.5m、南北幅4.5mの方形住居跡で中央には東西に直径50cmの柱穴が2個並んで検出された。住居跡の外側にも柱穴があったと考えられるが後世の攪乱の為に検出できなかった。この遺構に伴う遺物は土師器及び須恵器で、古墳時代末期のものである。

第VII調査区SP7801

全調査区を通じて検出されたピットのうち最大規模のもので径215cm、深さ130cmを測る。すり鉢状というよりはむしろ風呂釜状を呈する。ピットの断面には土層の変化はあまり見られず、掘り方から50cm下に炭や灰の層が4～5cmの厚さで円盤状に堆積していた。

すぐ下には赤く変色した河原石が数個散乱していた。ゴミ穴や焼却炉として用いられたのであろう。下層には割合大きな土師質土器や黒色土器の破片が集中していた。炭層をはさんでの遺物の変化は認められなかった。第III調査区のSD7801の時期より遅れる平安時代後期に位置づけられる。

(4) 遺物の出土状況

森広遺跡の遺物は攪乱層から採集された遺物、洪水によって流れ込んだ遺物、遺構内から検出された遺物に区分できるが、大半は攪乱層から採集されている。

正常な土層序は上から①耕作土（水田の黒い土）、②床土、③暗褐色耕作土（炭、灰、木の根、土器片を多く含み、戦前までは畑の土として用いられた有機物の多い土。①、②がない第III・IV・V調査区はこの土層が第1層となる。）、④褐色土（主として土師質土器の小皿や土釜の脚、甑の把手、須恵器片などの遺物を含み、上層に比べて固く締っている。）、⑤黒色砂質土（弥生時代から平安時代の遺物包含層及び遺構面）、⑥黄褐色砂（地山）の順となっている。しかし、正常な土層序は第III調査区の一部で確認できただけである。ほとんどの場合、みかん、柿、ブドウなどの栽培のために施肥の必要から攪乱を受けていた。その範囲は、おおむね地表下70～100cmまでの深さで、遺構直上あるいは遺構の上部を壊すものであった。

また、④、⑤の間には、一部に砂層が入り平安時代から鎌倉・室町時代に至る間に森広遺跡一帯が大洪水に見舞われたと考えられる。

遺物の水平分布は第Ⅲ調査区を中心とする東半部では古墳時代から中世の遺物が多く、第Ⅵ・Ⅶ調査区を中心とする西半部では弥生時代の遺物が圧倒的に多い。また、第Ⅰ調査区と第Ⅳ調査区は、ほとんど無遺物状態に近い状況であった。

(5) 主たる遺物

遺物の総量は整理箱（縦40cm、横55cm、深さ15cm）に約100箱を数えるが、弥生時代のものとして、弥生式土器（壺、甕、鉢、高坏）、石器（石鏃、石包丁、敲石、凹み石）、古墳時代から平安時代のものとして、土師器、土師質土器（壺、甕、鉢、坏、高坏、皿、盤、碗、甑）、瓦、須恵器（壺、甕、鉢、鉄鉢形土器、坏身、坏蓋、甗、盥、皿）、黒色土器（皿、碗）鉄製品（鉄鏃、刀子）、器種不明の銅片、軽石、平安時代後期以後のものとして土師質土器（小皿、碗、土釜、羽釜）、須恵器（甕）、輸入銅銭（中国の北宋のもので初鑄年1039年の皇宋通宝、1078年の元豊通宝各1枚）が出土している。

特に遺構内から検出された遺物は互いにセット関係があるので遺構そのものの年代を知る手がかりとしてのみならず、編年研究の上ではたす役割は非常に大きいといえる。

写真の遺物は第Ⅲ調査区のSD7801から検出された須恵器の坏蓋である。この蓋には「かえり」がなく「宝珠つまみの名残り」を残したひらたいつまみがくっついている。



ヘラ文字が刻まれた遺物の出土状況

内面には、写真のように「上」というヘラ文字が刻まれている。森広遺跡の遺物の中には、「主」という文字を刻んだものと「◎」、「×」、「/」などのように記号を刻んだものがあり、どんな意味を持つかについてははっきりしない。ヘラ文字のついた遺物は須恵器に「上」の字が2点、土師質土器の坏に「主」の字が1点みられたがいずれも、筆順を無視した刻み方をしている。一つの窯跡を発掘してもこうしたヘラ文字やヘラ記号の刻まれた遺物の占る割合は極めて少ない。性質解明の手がかりは他の遺跡の類例や窯跡の調査結果を調べてみなければならない。県内の窯跡調査が進んでいない今、この遺物がどこで焼かれ、どんな経路をたどって森広遺跡へ運ばれたのかは謎である。このほかにも遺構内から出土し、特記すべき遺物が多いが、詳細なる分析結果は次の機会に譲りたいと思う。

(6) 遺跡の性格

森広遺跡が弥生時代後期末から平安時代後期に至る遺構面と上層に平安時代後期以後の遺物

包含層を持つ複合遺跡であることは先にもふれたとおりであるが、③暗褐色耕作土中および攪乱層中に縄文時代晩期および弥生時代前期に比定できる遺物が含まれていたことを付記しておく。

森広遺跡出土の甕の口縁部は、いずれも「ゆるいくの字状（如意状）」を呈し、胴上半部に刻まれた断面三角形の篋描沈線が二条のものと三条しか判読できないものがある。

後者は最上部の沈線が口縁部に接近していることや沈線の間隔が狭いことから多条化の傾向が感じられるもので、森広遺跡や落合遺跡に先行し長期にわたって営まれた遺跡がこれより南の森広、菘神、極楽寺付近に存在する可能性を雄弁に物語っている。

また、第Ⅲ調査区の溝状遺構や第Ⅵ調査区の住居跡、第Ⅷ調査区の大型ピットなど各時代を代表する遺構と遺物が発掘されたことは、香川県の土器編年研究上大変心強いことといえよう。中でも、弥生時代に比べて以外と進んでいないのが平安時代以降である。第Ⅲ調査区の溝状遺構と第Ⅷ調査区の大型ピットとの比較は、わずかな差ではあろうが共に使用された土師質土器と須恵器の関係を明確にしてくれるだろう。

さて、個々に見れば住居跡はいずれも標高約34mの砂地に形成されたものであるが一方は円形プラン、他方は方形プランを持っており、時代が進むにつれて合理性が追求されたことを物語っている。円形プランを持つ住居跡からは完形品を含む多数の土器がうずもれた砂の中から発見されたが、弥生式土器は、香川県の標式遺跡である高松市大空遺跡につぐ弥生時代後期末に比定できる。

また、攪乱層中からの表採遺物ではあるが香川県には産せず吉野川流域に多い結晶片岩系の石でつくられた石庖丁や石斧は、当時の人々の交流範囲や交通路を考えるにあたって注目して良い遺物である。

第Ⅲ調査区の溝状遺構と第Ⅷ調査区の大型ピットの存在は、この近辺に平安時代の住居跡や集落の存在を想定させる。弥生時代の遺物が平安時代の遺構よりも上から検出されている点は土層序の観察から幾度かの洪水があったことを物語っている。 （六車）

讚岐国府跡

所在地 坂出市府中町本村

調査期間 昭和53年10月2日～昭和54年1月13日（昭和53年4月14日～昭和53年5月9日）

調査担当者 唐木裕志・大山真充（山本哲也・松本敏三〈瀬戸内海歴史民俗資料館〉）

(1) 調査の経過（目的）

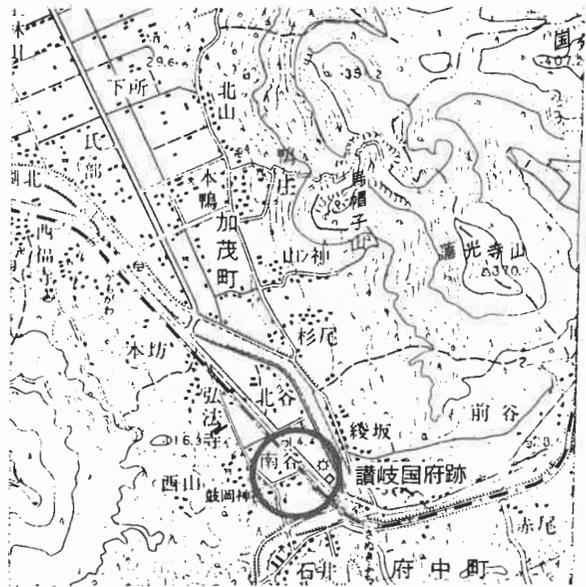
讚岐国府跡発掘調査としては、昨年度に引きつづき二度目である。

府中町本村付近は讚岐国府跡として周知の遺跡であるが、これまで本格的調査がなされていなかった。そこで、今度本遺跡を史跡として整備するための資料作成を目的に発掘調査を行った。（53-1～2調査区）また、53-3調査区は、上記調査中に住宅建築申請が出されたためこれも併せて緊急調査することになった。

なお、昨年度発掘調査の継続事業を国庁碑付近において（4月～5月）実施した。

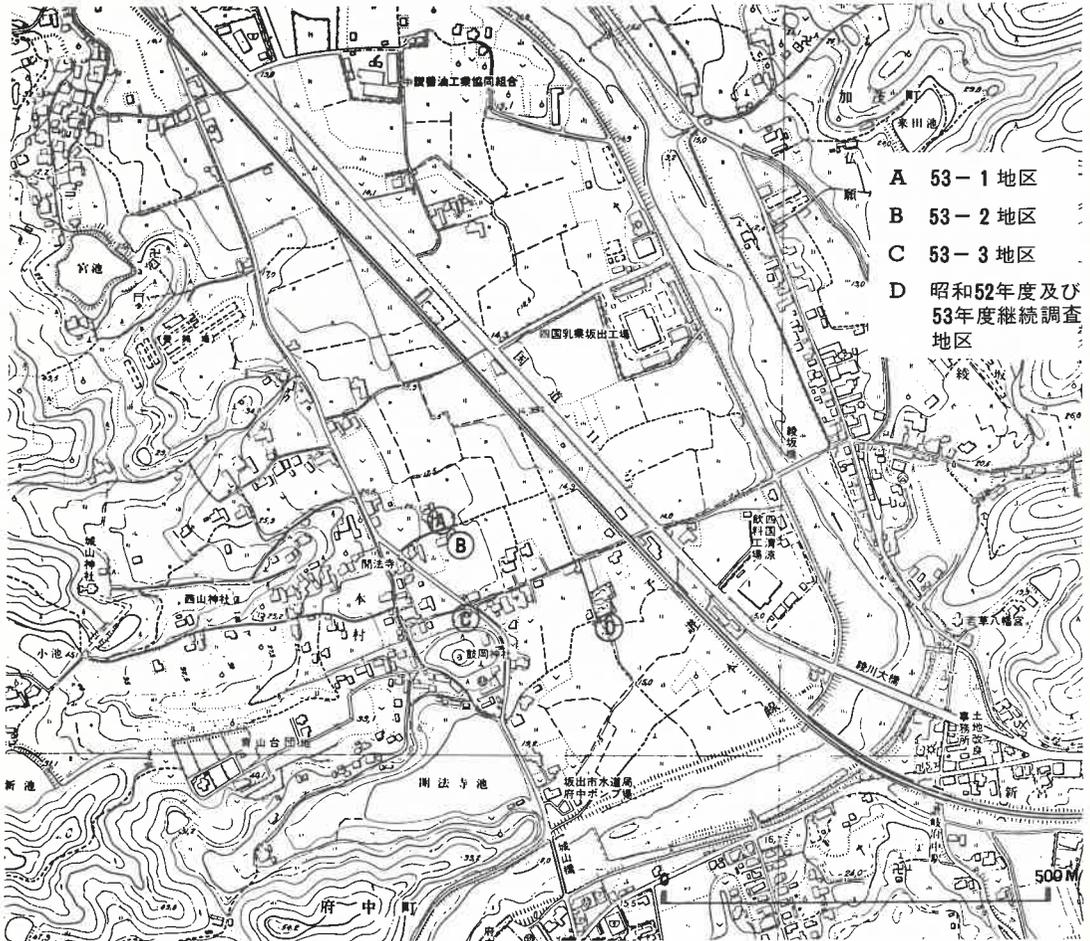
(2) 遺跡の概要（立地等）

讚岐国府跡は、綾川が中讃洪積台地に形成した崖端侵食谷を過ぎ沖積平野に流れる扇状地の基部に位置する。地形図をみると、綾川西岸にせまる城山の派生する丘陵尾根がこの国府跡一帯を西から東に向かって数条走っているのがわかる。さらに検討すると、これらの尾根筋は綾川堤防近くまで至っているようである。このことは、現地立って付近を展望しても明確には認められない。これは単に綾川の氾濫等による地形変化ではなく、人為的な削平・墾田等による変更が大きなウエートを示しているようである。従来、綾川が国府跡付近でその流路を東から北に直角に転向する点を指し、これを古代国府建設に伴う土木工事と見る意見が出されている。たしかに大正年間の洪水等の例に見る流路と比較するとうなづけるところもあるが、なお短絡に古代と結びつけるには検討の余地があると思われる。



第1図 讚岐国府跡位置図

(3) 調査の概要



53-1 調査地区

第2図 調査地区配置図

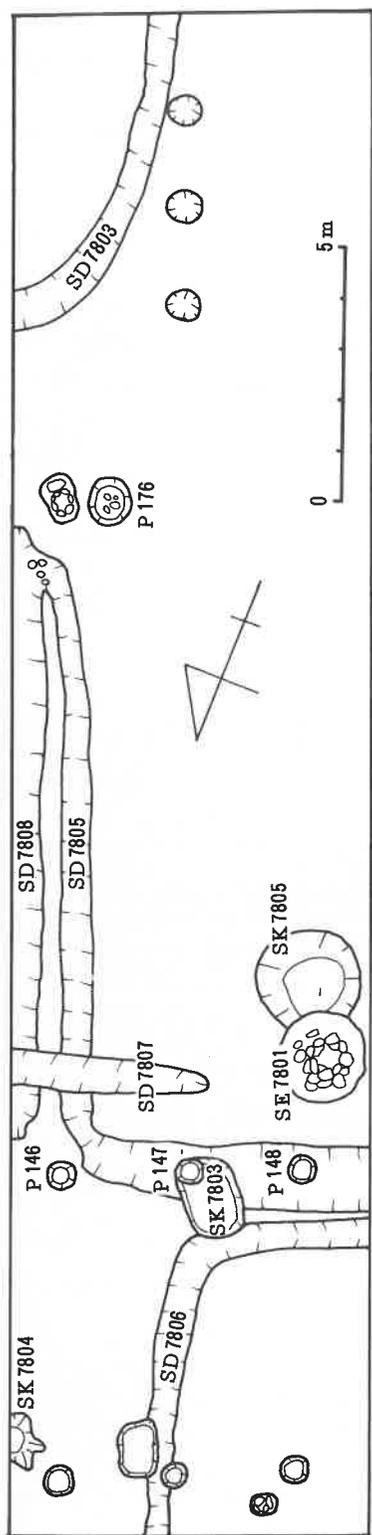
○大溝 (SD7801)

条里遺構はほぼ平行して南北に伸びると思われる溝が検出された。幅約1.5～1.7m、深さ60cm以上の大溝である。これの延長は調査区の制約で5mしかつかめないが、溝肩を底もすっかりとしており、何度も溝さらえが行われたためか堆積土にあまり汚れがなかった。

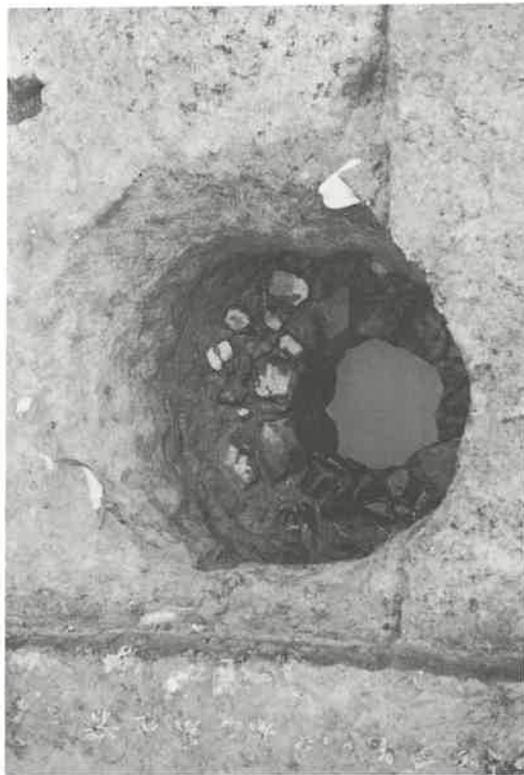
遺物では、やや硬質の瓦質土器が溝底から検出されたが、年代決定の決め手はいまのところ得られていない。今後の調査でこの溝の延長を確認していかねばならないだろう。

○掘立柱穴

中世遺物包含層の直下の層から検出されたもので大小2個の柱穴があった。残念ながらこの2個は性格を異にしており、列をなす他の柱穴も調査区外に求めなければならなかった。また、これらに伴う遺物も土師器の小片のみであった。今後調査区拡張する段階で明確にしていかなければならない。



遺構略図
53-2 調査地区



SE 7801 (井戸)

時期	遺構名	おもな遺物
I 期 (13)	SK 7805 P 176	土師質小皿, 坏, 台付皿 瓦器, 施釉陶器, 白磁, 青磁 須恵質土器, 布目瓦, 不明土製 品
II 期 (15)	SD 7805 SD 7806 SD 7808	土師質土釜, 備前焼甕, すり鉢 火舎の脚 亀山焼?, 土師質すり鉢 不明瓦質容器(花生?) 獣骨, 貝, 唐草文軒平瓦
III 期 (17)	SD 7803 SE 7801 SD 7807 SK 7803 P 146~148	土師質小皿, 施釉陶器, 唐津系 陶器
IV 期	SK 7804	

編 年 表

53-2 調査地区

ここでは遺物等の観察によりかなり明確な時代差が認められた。編年表及び遺構略図を参照されたい。

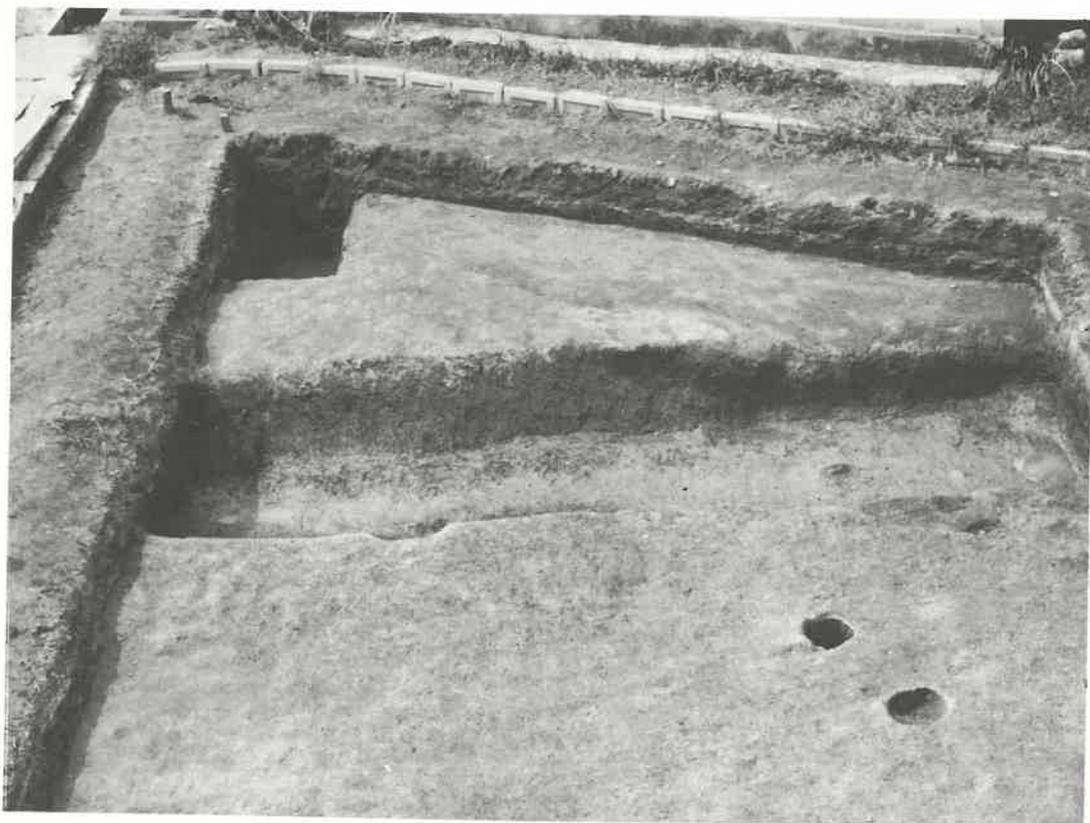
53-3 調査地区

ここは平安時代の崇徳上皇関係遺跡とも重複するところで、当初期待がもてたのであるが遺構らしきものは検出できなかった。しかし平安後期の緑釉埴(尾北窯産)をはじめとする土器等良好な遺物を収集することができた。またここでの調査で得られた成果として、鼓ヶ丘周辺における現地地形は平安末までの削平によって形成され、それ以後の変更が余りなされていないことが挙げられる。

(4) 遺跡の性格について

所期の目的であった古代国府に関連する確実な遺構を検出することはできなかった。また、遺物についても52年度調査地区で奈良時代のものが出土したが、53-1～3調査地区ではその時代までさかのぼる遺物は得られなかった。しかし、古代末～中世にかけての発掘成果については大いに評価できるものであった。

古代国府について現時点で詳述することはできないが、これまでの発掘調査結果から今後の



53-1 調査地区 SD7801 (大溝)



↑ 53-2 調査地区（調査風景）

調査地区選定にあたって、かなりこれを限定することができると思われる。

また、古代末～中世にかけての国衙を論じる場合、特に讃岐国にあたってはその史料等の不足からくる歴史学研究上

（ことに地域史研究における）の障害を打破するためにも、この時代の発掘成果は大いに有用になってくる。さらに国府域一帯に地域限定しても、綾川下流域における在庁官人層（綾氏など）の成長からむ律令体制崩壊過程（国衙領押領）・中世武士団（鎌倉御家人・細川家被官等）としての彼らの経済的基盤を追求してゆく資料にもなる。そして、広く地域を拡大すれば、中世の武士・農民層の生活を再現することにも活用できよう。（唐木）



→ 53-3 調査地区（調査風景）

西村遺跡

所在地 綾歌郡綾南町陶地区西村

調査期間 昭和53年10月23日～昭和54年2月6日

調査担当者 秋山 忠

(1) 調査の経過

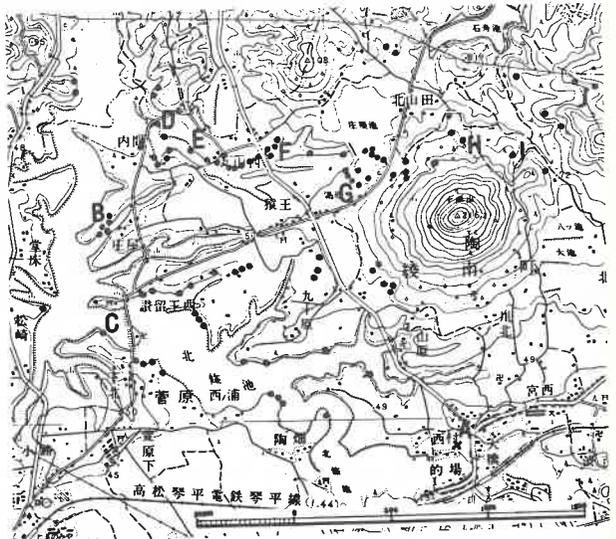
今回の調査は、県道府中・琴南線バイパス建設計画に伴い、綾南町陶地区西村の当該路線区域内に存在する桜塚及び無名塚の事前発掘調査を昭和53年10月23日～11月21日にわたって実施したものである。ところが、両塚の調査が進展するうち、周辺部から古代～中世にかけての建物跡や排水溝などが検出され、結局路線区域内の全面的な調査が必要となった。このため、すでに一部着手していた道路建設工事の中断、調査期間を昭和54年2月上旬まで延長するはこびとなった。

こうした調査の経過によって、これまで知られていなかった陶・西村遺跡の存在を明らかにすることができたのは大きな成果である。

調査が両塚の発掘に始まり、周辺に拡張していったこともあり、便宜上無名塚周辺地区（南調査地区）と、桜塚周辺から北側の地区（北調査地区）とに区分した。調査面積は北調査地区でのトレンチ部分を含めて概算1,700㎡ほどになる。

(2) 遺跡の位置（第1図）

陶地区西村の一带は、十瓶山の南方約700m、東から北条池に向かって延びる舌状台地のような地形を呈し、標高47m前後を測る。台地南側には北条池に通じる富川が流れ、北側は土瓶山山麓に向かって次第に下校する。現在、台地の中央部と南側富川に面した裾部に民家が集まり、周辺には水田地が広がる。調査地は、この台地東寄りの水田地にあたるわけだが、調査で検出した建物跡、排水溝、多数の出土遺物などから察して、どうも地形の



- | | | | |
|---|----------|---|---------|
| A | 西村遺跡調査地点 | B | 庄屋原窯跡 |
| C | 池宮神社南窯跡 | D | 田村神社東灰原 |
| E | 明神谷灰原 | F | 丸山西窯跡 |
| G | ますえ畑窯跡 | H | 十瓶山北麓窯跡 |
| I | すべつと窯跡 | J | カメ焼谷窯跡 |

第1図 西村遺跡と陶一帯の窯跡群

条件を同じくする西村台地一帯に遺跡の広がりがあるようだ。

ところで、土瓶山周辺、旧陶村には、早くから、古代の須恵器や瓦を生産した窯跡群の存在することが知られており、今でも約100基の窯跡が確認されている。特に、十瓶山北・西麓から綾川右岸の丘陵地帯に集中的に分布する。一般には、陶邑古窯跡群とか十瓶山窯跡群と呼ばれ、県下で最大の古代窯業遺跡をなしている。「陶」といい、「十瓶山」といい、まさに窯業を象徴する地名であり、さらに、ますえ畑・仁陶（すべと）などこれに係る小字名が数多く残る。

西村の地は、そうした古代窯業生産地にあって、ここでの遺跡のあり方は、それとの関連性を抜きにしては考えられないだろう。

(3) 南調査地区の概要 (第2・3図)

無名塚、この塚は特に地元で固定した呼び名がないので無名塚と称する。現状で長さ2.8m、幅1.1m、高さ0.35mほどの楕円形状をしていたものであるが、盛土下から方形石積みが見われ、その下部では1.4m×0.5mほどの範囲で石を並べ置いたような状況となった。北西側の石の間から刀の一部が出土したが、錆化が進み三片に折れており、旧状を推測し難い。これ以外には須恵器あり、土鍋の脚あり、近・現代の瓦片ありと雑多、なかでも石積みの中から近・現代の瓦片が出土したことは、この塚が新しく修復されたことを物語る。また、塚の基部となる黄褐色地山粘質土面からは塚築造以前の柱穴跡が認められた。



第2図 南調査地区遺構検出状況(南より)

では、塚の旧状や築造時期はどうか。東側に巡る0.5~0.9m幅、深さ10~15cm程度の溝は明らかに塚に伴うもので、これより旧状は径4m前後となる円形状を有していたものと思われる。溝内から築造時期を決定でき得る遺物は検出されなかったが、枝溝内の遺物、周辺の塚以前の状況からみて、平安~鎌倉期にかけての建物群が廃棄(一部廃棄も含めて)された後の築造、即ち、中世の早い時期に係るものだとするのが妥当であろう。

この地区約400㎡の範囲で、大小合わせて二百を越える掘立柱穴跡が検出された。径15cm前後、深さ15~30cmのものから径30~40cm、深さ20~70cmにもなるもの、中には大柱穴内に2~3個の小柱穴跡をもつ複合柱穴や詰め石、根石をもつものもある。これらの柱穴は、内部から出土した須恵器、土師質土器、瓦片などにより、古いもので平安時代前半頃に遡るものがあり、多くは平安後半~鎌倉時代にかけて造られたものである。検出時において、南端部で2間×3間様の建物が想定された他は、柱穴の形状、規模、配置等を把握できないほどの入り組みがあ

り、おそらく、該当の時期に何回となく建物の建て替えがあったのだろう。いずれにしても、これだけの柱穴が示す建物跡はそれが何であれ、このあたりに、かなりの集落の形成があったことを物語る。

枝溝を伴う数本の素掘り溝のうち、最も確かな形状を保っているのは、北端部の幅0.6~0.8m、深さ15~25cm、南東から迂回して西に向うものである。溝内遺物は殆ど日常雑器と考えられる須恵器、土師質土器片で、この溝が建物群に付属する生活排水路としての性格を有していることが分る。

主たる出土遺物として、須恵器（壺・甕・坏・鉢・須恵器小壺など）、土師質土器（碗・鉢・小皿・三足付土鍋など）、瓦（軒平瓦・平瓦・丸瓦など）、青磁、白磁などがあり、須恵器や瓦については十瓶山窯跡群の中に生産地を求めることのできるものが多い。青・白磁片は良質の中国輸入品と見受けられる。

（4）北調査地区の概要（第4・5・6図）

桜塚には、古く平家落人桜子姫の塚だという興味ある伝承があり、また旧地主宅に残る明治13年の地券に「外五歩，墓地」と付記されている。現状ではとても五歩を測れないが、南北6.5m、東西3.5mの方形、周囲縁辺に比較的新しい石積み囲いを設けていた。盛土は北寄りに水田地から80cmほど高まり、5~6層に区分されるが、各所で築成後の攪乱があって縦横断の層序に一貫性がない。その3~4層目あたりに不整な土塚が3ヶ所見つかかり、骨片及び灰を含んだ埋土があった。火葬人骨の簡易な埋葬か。中央南寄りでは地山面を掘り込む1.3×1m大の隅丸方形状土塚が認められた。底部に残る河原丸石の状況からみて、これが塚本来の埋葬主体部ともいふべきもので、おそらく、塚内に河原石積みの石室状納骨部が造られていたものだろう。後世、主体部が崩された際、投げ出された用石が南端部に集石していた。なお、底部にちかい壁面から寛永通宝6枚が重なって出土した。また、この土塚に接し、塚築造前の溝を掘り込んだ石積みの埋葬施設があり、上部の石積みは墓標様、下部から頭骨の一部、木材質の残存物、寛永通宝12枚が出土した。本来箱様のものに納骨埋葬したものが標石の落下で現状に至ったものか。こうした状況から推して、桜塚は近世後半期の築造になるもので、以来この場が墓地として使用されていたのであろう。

この地区では、特に塚北側区域におい



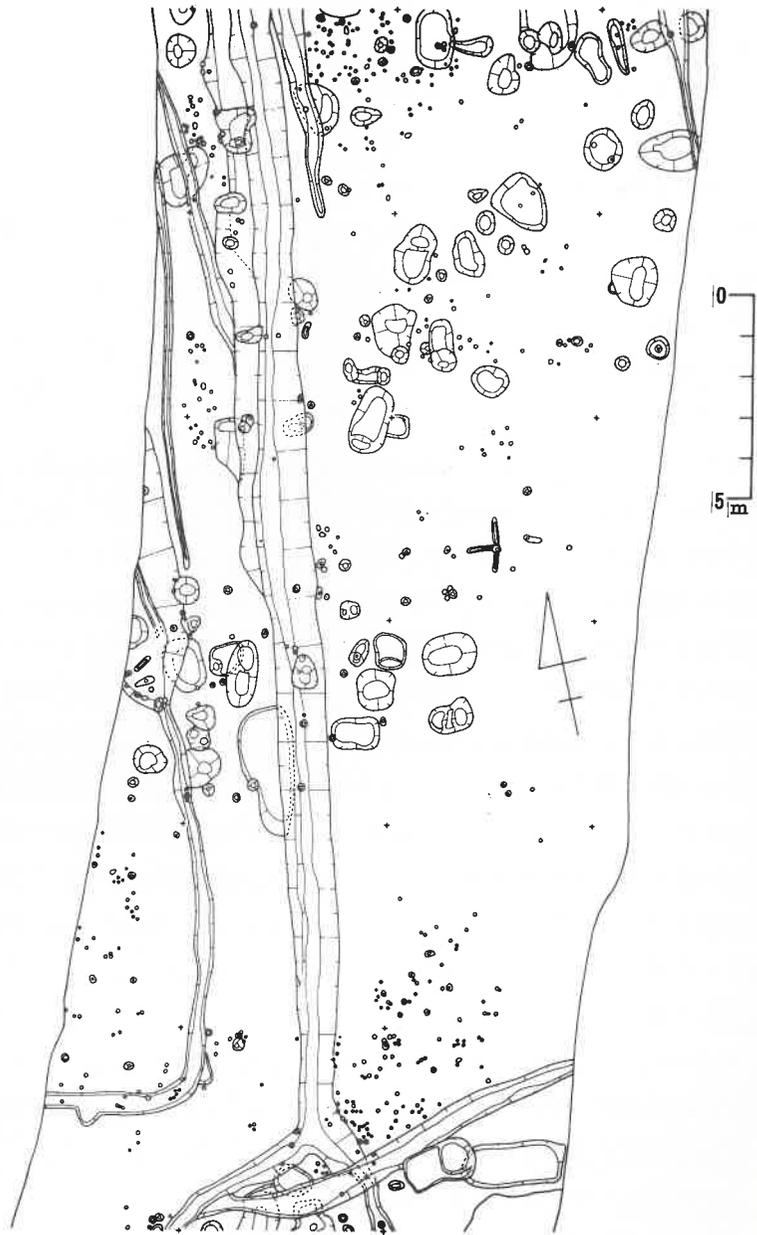
第3図 南調査地区柱穴内遺物出土状況



第4図 桜塚最下部埋葬施設検出状況（西より）

て数十個の土塚が検出された。大小・形状まちまちな土塚群で、在り方にも規則性がなく性格の把握に苦しむ。ただ、古代の蔵骨器に用いられる須恵器壺・甕片を伴う土塚がいくつか見られるところから、また殆どの土塚における暗灰色粘質の埋土が有機質の腐蝕によるものとすれば、敢えて推論して、これらの土塚が蔵骨器を埋納、あるいはそれを用いない土塚墓ではなからうか、と考える。しかし、それはどうもこの地区の土塚群に対して一般的でなく、速断は許されない。なお、炭粒・灰・焼土を包含する楕円形状の浅い土塚が2ヶ所認められ、内部に須恵器、土師質土器、瓦片などが雑多の状態に埋まっていた。埋土は一層位を示し、一時的に使用されたものだが、窯場とするには周辺を含めた状況が思わしくない。

素掘り溝のうち、桜塚を貫くものはほぼ南北通りの流れをもち、北向いに幅、深さを増して台地傾斜面に至る。途中の切り合い関係や溝内遺物からみて、土塚群より時代が下るものといえる。発掘区北寄り、南東から迂回しながら台地傾斜面を北向きに注ぐ溝は、さらに時期差を考えるものである。これらは、遺物の内容や周辺の状況から、やはり農業用水路とするには無理があるようで、生活跡に付属する排水路と考えた方が適当である。



第5図 北調査地区中央部遺構平面図

桜塚東側の落ち込みは深さ80cm前後、長径約9mの楕円形の池状をなすと見受けられる。底部にちかい層序はいわゆるベタ状の細かい粘質土であり、それなりの溜水があったものといえる。

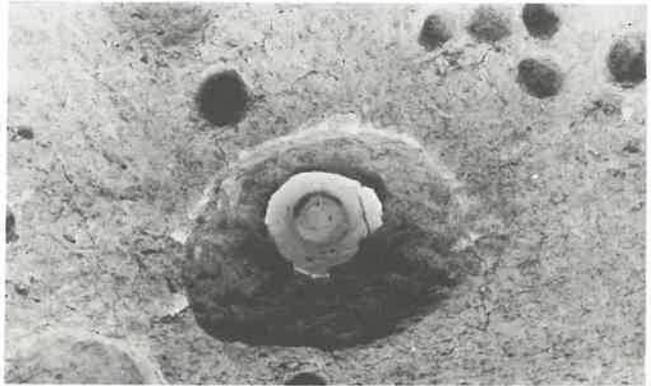
遺物の須恵器や土師質土器、瓦などについては南調査地区とほぼ同様種類のものが出土しており、遺物の年代に時期差が殆どないことを示している。ただ、年代の比定に大きな手掛りとなる輸入銅銭20枚が注目される。判読不能なものを除いて、太平通宝（976～983年鑄造）に始まり大観通宝（1107年鑄造）までの北宋銭8種類となる。輸入流通の時期幅をかなり考慮しても、これらが平安後半～鎌倉時代にかけてこの地にもたらされたとしてよいだろう。須恵器や土師質土器は、土塚出土のものについて平安時代前半期が考えられる他は、平安後半～鎌倉時代前半頃に属するものが多く、発掘区北寄りの素掘り溝に係るものはこれよりやや時期が下るようだ。いずれにせよ、遺跡の中心年代はほぼ古銭の時期に該当するわけである。

(5) 調査のまとめ

今回の調査は、両塚の内容はともかくとして、南調査地区で集落を形成していたと見られる建物跡が認められ、北調査区ではもう一つ遺跡の性格を明瞭にする遺構の検出がなかったが、多種多様な遺物の出土があつて、それなりの成果をあげることができた。

特に、古代窯業の地元が存在する遺跡だとしても、直接生産の場（例えば、亡陶窯跡・田村神社東灰原・丸山西窯跡・カメ焼谷窯跡・十瓶山北麓窯跡・内間窯跡・ますえ畑窯跡など）と結びつく出土遺物が多数認められたことは、当時の陶窯業の発展を生々しく感じ取らせる。南調査地区において認められた建物跡が直ちに陶窯業者の居住跡乃至は集落だとはいえないけれども、今さらながら深い係り合いを考えざるを得ない。

陶窯業の始まりについては、正確なところが解明されていないが、奈良時代に入って活発な展開をみるようになったであろう。10世紀の「延喜式」には讃岐国から器種に富んだ大量の須恵器を「調」として年々差出すことが定められているが、古代讃岐国にあって、この陶の地はまさに一大窯業産地として位置付けられていたと容易に想像される。そこには、窯業に携わる人々の専業技術者集団としての誇りもあっただろうし、彼等の生産活動は、発展途上にあった商品流通の経済活動をも、この地にもたらし、いわば先進的な陶村の発展に寄与したはずである。調査で出土した多数の須恵器、古銭や青・白磁などは、そのことの証しでもある。



第6図 北調査地区土塚内遺物出土状況

上母神第四号墳

所在地 観音寺市木之郷町字上羽上 438 内第 1

調査期間 昭和53年 3月15日～5月15日

調査担当者 沢井静芳・真鍋昌宏

(1) はじめに

香川県の西部に位置し、寛永通宝の砂絵でよく知られる観音寺市の東南に小高い丘陵（標高 92.1 m）が見られる。この丘陵の西を流れ、瀬戸内海に注ぐ柞田川、そしてこれによって形成された沖積平野（三豊平野）を望む立地をもつ。これを母神山はがみやまと言うが、この山の西側斜面を中心として香川県屈指の群集墳が所在する。円墳・前方後円墳各一基を盟主とするかのように、直径十余mの円墳が数基ずつのまとまりをもって存在する。

本墳は、5基連続して並ぶ円墳のうちの一基で香川県教育委員会の指導の下に建設工事に伴って緊急調査を実施した。その概要を簡単に述べることにする。 （沢井）

(2) 遺構について

第4号墳は、墳丘径11.6 m、墳丘推定高 2.0～2.5 mを計る円墳である。墳丘を取り囲む形で、幅 2 m前後、深さ1.50 m前後の周溝（V字溝）が存在した。主体部は、主軸をN-58°-Eにとり、片袖式の横穴式石室である。石室規模は、全長4.55 m、玄室長 2.0 m、羨道長2.55 mで、玄室幅1.45 m、羨道幅（玄門部）0.80 mを計り、若干「胴張り」状を呈する。天井石は失われており、石室現存高は0.70 m前後で、玄室・羨道共に敷石を有する。敷石は上下二枚確認された。羨道部外側には、主軸とほぼ直交する形で墓道が、平行して排水溝が検出された。

(3) 遺物の出土状況

玄室内の遺物として、石室北東隅で検出された須恵器短頸壺・短脚高杯のセット、東側壁ぞいで検出された鉄刀・馬具などを含む鉄器、西側壁ぞいの耳環・玉類があげられる。いずれも原位置を保っているものと思われた。

墳丘部では、墓道南肩出土の長脚高杯片と砥石、墓道床面上で検出された土師器碗、墳丘西側斜面の大甕片がある。他に、石室埋土中及び周溝内より、多数の須恵器片を得たが、大半が細片であり、溝底上もしくはその近くで検出されている。

(4) 主たる遺物

装身具・武具・農工具・馬具・土器に大別することができる。武具・農工具などの鉄器には、出土数のわりに形式数が多いという特徴が見られ、特に鉄鎌では、出土数12点で二大別五分類することができた。馬具は、轡・引手・鏡板が出土しており、一セット半が副葬されていた。

土器は大半が須恵器であり、特に玄室内出土の短頸壺と高杯のセットは、その内容物ともども
共伴資料としての価値も高い。

(5) 遺跡の性格

母神山山麓に所在する古墳の中で、今回調査した上母神第4号墳は、他に比べて規模の大きな周溝を有することは特筆できる。これが上母神支群通有のものかどうかは、一基の調査では判断できないが、今後の課題となろう。

築造年代は、玄室内出土の須恵器から見て6世紀後半と考えられ、追葬は認められなかった。母神山古墳群の性格を考えるうえで、貴重な資料を提出することができた。

(6) おわりに

本墳の発掘調査報告書は、上母神古墳群発掘調査団より、『上母神第4号墳発掘調査報告書』として1978年9月に刊行されているので、詳細については参照されたい。 (真鍋)

尾ノ背寺跡

所在地 仲多度郡仲南町大字七箇字之尾

調査期間 昭和53年9月15日～9月23日

調査担当者 齊藤賢一 西山佳代子

(1) 調査の経過

昭和53年8月、送電線用鉄塔の建設工事中に尾ノ背寺跡の通称墓の丸と呼ばれている所から白磁の破片が発見された。報告を受けた県教委と地元仲南町教育委員会では、早速現場の保存をはかると共に文化庁へ報告し、緊急調査を実施した。

(2) 遺跡の概要

尾ノ背寺遺跡は、讃岐と阿波を隔てる阿讃山脈から北に派生する尾根の一角にあり、標高約570mを計る。眼下には満濃池を見下ろし、そのはるか彼女には備讃瀬戸や吉備国をも見わたすことができる。尾ノ背寺は鎌倉時代の僧道範の著「南海流浪記」によれば、

「宝治二年十一月十七日、尾ノ背寺参詣。此ノ寺ハ大師善通寺建立之時ノ山云云。本堂三間四面本仏御作ノ薬師他。三間ノ御影堂…」

とあり、その後いつ廃寺となったかは明らかでないが、現在寺域の一角には尾ノ瀬神社が建立されている。寺に係わる地名としては、墓の丸をはじめ城の丸・久保(丸坊)などが広範囲にわたって所在し、往時の勢いを偲ばせている。

さて、今回調査をおこなった墓の丸は尾ノ瀬神社から約70m程下った標高480mの突出部分にあり、雑木を伐開した約600㎡の範囲には、河原石を用いた六基の石積みが確認されている。調査した遺構は尾根の主軸線上に在り、なかでも比較的保存が良好と思われるものであった。当遺跡周辺には古代・中世の周知された遺跡は発見されていないが、これも当遺跡の立地する環境をよく表わしている。

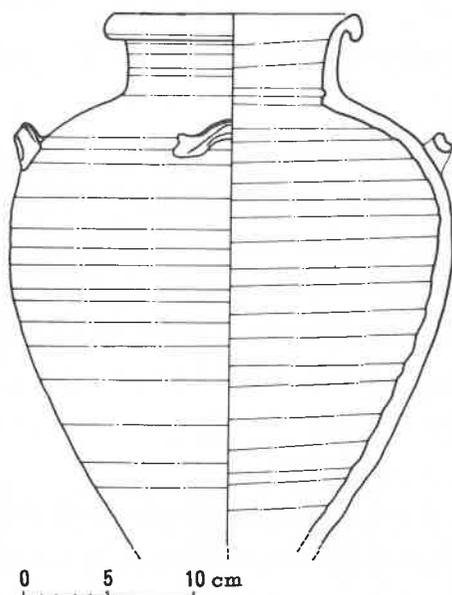
(3) 遺構について

石積みはほとんど偏平な砂岩を使用しており、外見上からは、円形を呈するものや方形を呈



第1図 遺跡位置図

するものなどその形態は一様ではない。白磁片の出土した塚は、尾根筋のほぼ中央部に位置し、やや北の斜面に重心が傾いた感を呈する。周囲の石積みに比べるとやや大きく、径5mを計る。石積みを構成する石の配列順序にはっきりとした規則性は見られない。しかし、基底周辺部では直線を意図して四辺を構成するように並べたと思われる大き目の石が検出された。石を積み上げるために地山を削平して整地した跡は見られない。尾根筋から少し北寄りのところで地山は1つの段をつくっているが、石はこの段に沿って積みあげられたように重なっている。使用されている砂岩はほとんど角が取れており、明らかに河原石と思われる。ただ、周囲の石積みには大きな山石を利用したものも認められる。石の大きさは径10~30cmを標準とするが、中には50cmに達する大きなものも使用されている。厚さは、ほぼ10cmを標準とする。また重量の平均はほぼ2kgを計るが、大小様々なものが使用されている。形態については、根の侵入による攪乱や氷結による石の小片化によって原形を保っているとは考えられない状態であった。検出状況から見ると、白磁片の出た中央部が4~5段と高く、縁辺部に向かうに従って1~2段に減じて低くなっている。また、四耳壺の埋置遺構については、調査前の工事により破壊されており、残念ながら検出できなかった。しかし、その位置はほぼ中央部と考えられる。



第2図 白磁四耳壺実測図

(4) 遺物の出土状況

発掘の契機となった白磁四耳壺は、工事中偶然出土したもの、その後仲南町の予備調査により出土したもの、そして本調査で出土したもの、と三度にわたって出土している。その出土位置は、ほぼ中央の石組みがやや空いているところである。いずれの場合もまとまった状態でなく、土の中に混入した状態で出土している。須恵器・土師質土器についても同様の状況で、残念ながら埋置状態は確認できなかった。このように、出土遺物の多くが攪乱により原位置や原形を保っていないと判断でき、四耳壺や須恵器が何の目的で使用され埋められたか、ひいては石積みの目的が何かもはっきりと確認することはできなかった。

(5) 主たる遺物

今回の調査により出土した遺物で特に注目されるものは白磁四耳壺である。残念ながら底部を欠損している。高さほぼ25cmと推定される。口縁径は約10cmを計り、体部内壁下端より肩部にかけてやや深目のらせん状の溝が認められる。内外壁ともに灰緑色の釉がかかっているが、内壁の一部にかかっていないところが見られる。同じ形式のものが寒川町の藁神社から出

土しているが、本例が底部を欠損しているとはいえ、口縁のひねり返し、肩の張り具合等の形態的特徴は、保元元年（1156）の経筒と伴出した松山市石手町経塚出土の白磁四耳壺に通ずるものがあり、12世紀の年代を設定することができるものと思われる。

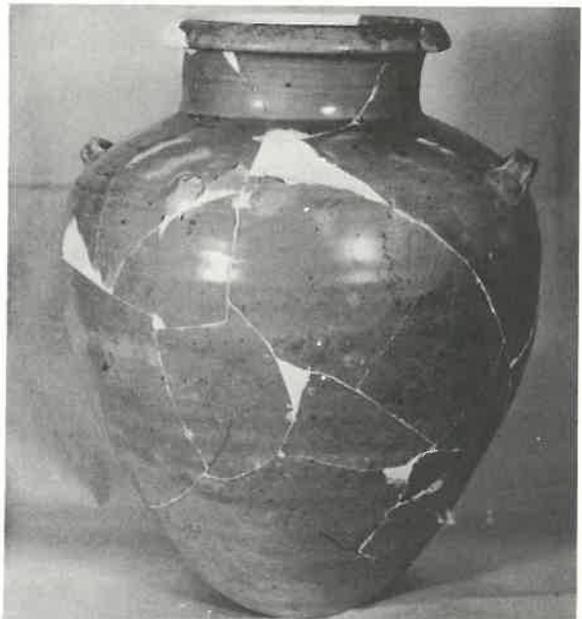
その他、須恵器の若干の破片を伴出している。

（6）遺跡の性格

今回の調査では墓の丸に所在する石積みの一基を発掘したにとどまり、しかも、攪乱のため遺構のプランや遺物の埋置状況がはっきりとわからなかった。しかし、これが尾ノ背寺と深い関係のある遺構であることは言うまでもない。仲多度平野の最も奥地に所在する中世山岳寺院の性格を知るためにも、尾ノ背寺について今後の調査に期待するところが大きい。



1 石組み（東より）



2 白磁四耳壺

宝 幢 寺 跡

所在地 丸亀市郡家町字下所 325 番地

調査期間 昭和53年10月11日～同年12月10日

調査担当者 寒川知治 沢井静芳

(1) 調査の経過

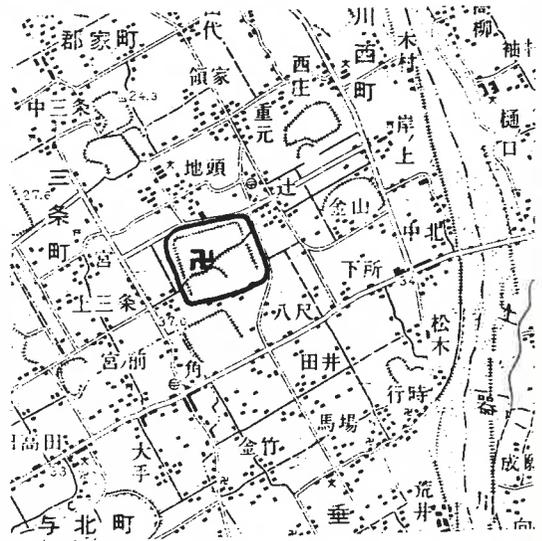
宝幢寺上池，宝幢寺下池，仁池の3つの池よりなる通称宝幢寺池の池中より古瓦が出土すること，及び宝幢寺下池の南西部に巨大な塔心礎が遺存していることは古くより知られていた。しかし宝幢寺の伽藍配置については，従来下池の池底に残された土壇状の高まりの状況から，塔の東に金堂，北に講堂を配する法隆寺式のものではないかとの推定の域を出なかった。

そこで丸亀市教育委員会は香川県教育委員会の協力を得て伽藍配置及び寺域の確認と，遺構がどの程度残されているかの二点を明らかにすることを主たる目的として遺跡確認調査を実施した。

(2) 遺跡の概要

東西を流れる土器川と金倉川によって形成された丸亀平野には，温暖少雨の瀬戸内式気候のため数多くの溜池が点在している。宝幢寺池もその一つで，標高30～35mの地点に位置している。

宝幢寺の周辺には北に京極氏の丸亀城，西に善通寺，さらに南に金刀比羅宮と律令時代以降の西讃地方の政治，経済，文化の中心地があり，位置図にも見られるように現在でも，官衙，条里制，荘園制のなごりを各地に残している。



第1図 宝幢寺跡位置図 1:50,000

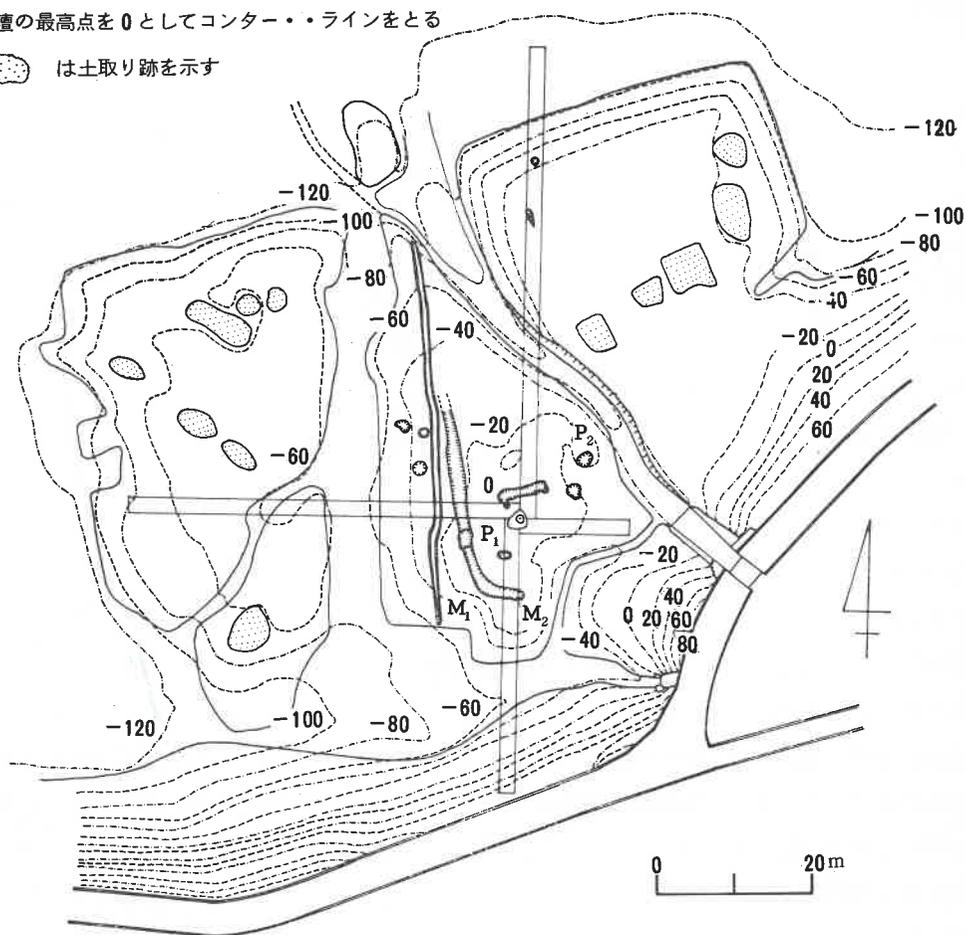


第2図 宝幢寺跡を望む(東より)

寺の創建は出土古瓦等により奈良時代前期（白鳳期）と考えられ、当時は七堂伽藍の完備した立派な寺院であったが、戦国時代末期戦火にあい灰燼に帰した。後、寺は再建されることなく周囲に土手を築き、宝幢寺池として下流の田畑を潤して今日に至っている。

注 土壇の最高点を0としてコンター・・ラインをとる

 は土取り跡を示す



第3図 宝幢寺跡地形実測図

(3) 遺構について

(A) 土壇

現在、宝幢寺下池の中にみられる塔の心礎を中心とした土壇上には夥しい河原石が散在し、その形状は一部上池からの通水の便を図るために掘削されているが、N 20° Wの方向をもつ一辺およそ 100 m の方形を呈する。

土層は基本的に三層に分けられる。第一層は30cm大までの礫を含む黄色粘質土、第二層は第一層と同大の礫を含む灰白色粘質土、第三層は暗灰色砂質土層（砂利層）である。第一層と第二層が土壇として造成されたもので、礫を粘質土で固めた堅牢無比の基礎工事である。西トレンチにおいては、この層序のみられる土壇が三か所、断面にあらわれる。これは礫が群在する

高まりの部分とも一致する。東トレンチは上池の水口に近く、土手改修の際かなり土取りされたよう deformation が顕著である。南トレンチではその方向につき出た土壇をもち、その落ち肩は北トレンチと異なり、さほどの比高差をもたない。北トレンチは、土壇の落ち肩の状況がよくわかる断面を示す。肩の部分にはかなり大きな礫(30cm大)が配され、堅固にしている。

(B) 基壇

版築技法による基壇土は、断面にも心礎を中心とした調査区でも検出されなかった。心礎の現状、あるいは礎石はもとより、その抜き取り穴も無いという状況からすれば池築造の際、削り取られた可能性が十分考えられる。

(C) 溝状遺構

心礎より西へ7mと10mの地点で2本の溝状遺構を検出した。溝Ⅰは幅2m程で、北に延びる部分は細くなっており、南方向で東に曲がっている。掘り方は浅く、検出された瓦片も小片で磨滅しているものが多い。

溝Ⅱは幅120cm、深さ28cmのほぼ南北(N7°W)方向に走る、全長50m程の遺構である。この溝の性格はよく分からないが、土壇築成後掘りこまれたと思われ、礫を多く含むややさくい黒色粘質土が溝を埋めていた。この溝は殆んど遺物を含まず、わずかにかなり磨滅している瓦片、土師質土器片、一見青磁の感を呈する磁器片を出土したのみであった。

(D) 土壇

心礎を中心とした調査区と北トレンチで、最近土取りをした痕跡を示すものを含めて10個の土壇を検出した。遺物を出土したのはP₁、P₂の2つの土壇のみであるが両者はお互いにかかなり異った出土状況を示す。即ちP₁は玉縁つきの丸瓦、四重弧文軒平瓦、平瓦などのさほど磨滅していない大形の瓦片を出土した。堆積土も他の土壇と異なり、土層が三区分別され瓦を割と古い時期に廃棄して埋めたことがわかる。

P₂の方は磨滅した小形の瓦片が多く、後世に瓦片が投げ込まれたものであることを示している。

(E) 塔婆心礎

花崗岩の心礎は南北230cm、東西185cm、深さ120cm以上の大きさをもつ。構造は上面に直径90cm程の柱座を掘り、さらにその中央に舍利孔をうがっており、飛鳥・奈良前期に多い型式である。

当初、動かされた可能性も考慮に入れていたが、調査の結果、心礎は第三層の砂利層の上面に据えられ、それを周囲から礫と粘質土で固めており、動かされた形跡はない。

(4) 遺物の出土状況

遺物は若干の土師質土器や磁器を除くと、瓦片ばかり



第4図 瓦出土状態

りである。その多くは遺構に伴わず、土壇上で表採されたものである。また遺構より検出されたものも、かなり磨滅した小片が多く、大形の瓦片を出土したのはP₁と称される土壇のみであった。

(5) 主たる遺物

今回の調査においては残念ながら完形の瓦は出土しなかったが、宝幢寺の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができた。

拓影1・2は軒丸瓦の小片である。1は外区の周縁に鋸歯文がはいり、連珠文がめぐっている。既に完形のものが池中より採取

されており、それによると瓦当の径16cmの八葉複弁蓮華文軒丸瓦で、中房の径は3.5cm、蓮子は中心より1・6・12と19個を数える。

2も1と同じ特徴をもつが、瓦当の径は1より大きい。

3は四重弧文軒平瓦で、この他にも三重弧文軒平瓦片も出土している。宝幢寺の軒平瓦は非常に焼きがよく堅緻である。

これらの瓦はいずれも奈良時代前期（白鳳期）の特徴を有しており、従来考えられてきた創建時期が妥当性をもつものであることが明らかとなった。

(6) 遺跡の性格

今回は調査を寺域の全域に及ぼすことはできなかったが、宝幢寺がこの地に存在していたこと、この寺が他に類例をみない特異な基礎工事をおこなっていたことが確認できた。また心礎から北と南に設定したトレンチによって寺域の北端と西域が推定できるようになった。ただし西域については宝幢寺池の築堤の際に一部削平された可能性を留保しておきたい。

伽藍配置については、法隆寺式の伽藍配置が想定されていたが、今回の調査では心礎が寺域のほぼ中央部に位置することが明らかとなった。その点からすると、法隆寺式の伽藍配置には疑問がもたれる。

菅家文草によれば古代の讃岐には28の官寺があったとされている。宝幢寺もその一つで、しかも豊中町の妙音寺、府中の開法寺と共に讃岐でも最も古いグループのものである。那珂郡はその整備された条里制と生産性の高い土地柄によって古代讃岐の主要な拠点となっていた。宝幢寺はその那珂郡の郡司庁に隣接して建立された寺院で、今後この寺院跡の本格的な調査が進められその性格がさらに解明されることになれば讃岐の古代史研究の上に寄与することが大なるものと考えられる。 (寒川)



第5図 出土瓦拓影

勝 賀 城 跡

所在地 高松市鬼無町・香西町・植松町・中山町に跨る勝賀山山頂部
調査期間 地形測量（業者委託） 昭和54年1月中旬～3月中旬
試掘及び周辺部踏査 昭和54年2月13日～2月24日
調査担当者 秋山 忠

(1) 調査の経過

中世讃岐の代表的豪族香西氏の牙城であった勝賀城跡については、これまで各方面の調査研究があり、西讃の天霧城跡とともに中世山城の好例として評価されてきた。しかし、城跡の構造形式（縄張）を全面的に、正確に把握して本城跡の性格を明らかにしていこうとする調査研究は、調査の困難さもあって十分ではなかった。このため、高松市教育委員会では、国庫及び県費の補助を得て、このたび本格的な城跡確認調査を実施するはこびとなった。今回の調査は城跡の全容を図化する地形測量と本丸跡内の状況を把握する試掘調査や周辺部の踏査を行うものである。

(2) 城跡の位置（第1図）

勝賀山は、高松市の西郊鬼無町・香西町・植松町・中山町に跨り、五色台山系の東端に位置する。標高364mを測る山頂部は、略南北に連なる山並から一際高まった台地状の山形をなし、いわば杓文字形の頂部平面をもつ。山麓部にかけては、短い丘陵尾根が幾筋も派出して広い裾野を形造っている。そのせいか、一見取り付き易い山容に受取られるが、谷あいはかなり複雑に入り込み、また山頂から周囲山麓部への見通しも良く、中腹あたりからはどこを見ても急坂、急崖状でまさに峻険な自然の要害地形の様相を呈している。

山頂部からは眼下に東・南方に開けた平野部を収め、北方に広がる備讃瀬戸海



第1図 勝賀城跡の位置

- 1 勝賀城跡 2 佐料館跡 3 作山城跡
4 藤尾城跡 5 芝山城跡

城への展望も絶好である。それは、容易に陸海のどの方面にも通じて事を成し得る立地条件の十分さを物語るものであり、この地域における一焦点となるべき意味を持っている。帰するとこゝろ、ここに香西氏が人智と労力を傾けて築城したのは至極当然のことではなからうか。

(3) 城主香西氏の略年譜

18代4世紀にもわたる栄光の歴史を讃岐の地に綴った香西氏は、讃岐藤原氏の後裔たる左近将監資村に始まる。承久の乱（承久3・1221年）で戦功をあげた資村は、阿野・香川四郡を領し、讃岐藤氏63家の棟梁として勝賀山に築城、山麓佐料に居館を営む。以来、香西氏は周囲十数ヶ所の要所に一門の城郭を構えて陸海を制圧し、中世讃岐を代表する豪族に発展していく。3代資茂は、備讃の海域を脅かす海賊追討の功により、執権北条時頼から塩飽・直島・小豆島などの諸島警備の任を受け、次第に制海権を掌握強化し、7代親茂の頃には、讃岐南朝勢力の討伐に当たった細川定禅を通じて足利尊氏に属し、これを契機に管領家細川氏との関係を深める。10代家資の後、家督をめぐる思わぬ内紛が生じたが、13代元資を迎え、管領細川勝元の信任厚く、香川・奈良・安富氏と共に細川四天王として勢威を張る。15代元定は、周防大内義興と連盟して朝鮮、東シナ海に雄飛、活発な交易により財力を積み、香西家全盛期を展開するわけだが、そこには備讃諸島を足場とした香西水軍の力があつた。この豊かな財力を背景に16代元成は、阿波三好家の讃岐進攻に際し硬軟両様の高度な政治力を発揮して一族の安泰を図る。

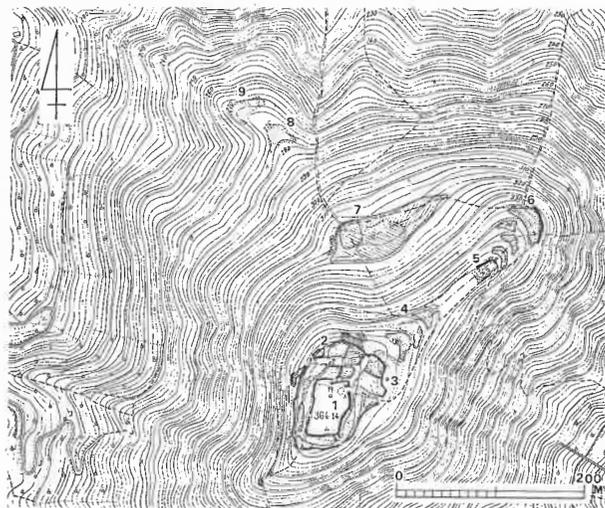
そして、若き盲目の城主18代佳清に至りて名門香西氏の系譜は悲劇的に幕を閉じる。一族の内紛、同族羽床氏との抗争など波瀾に満ちた道程は、土佐長宗我部元親軍の侵攻によってさらに曲折する。1582年（天正10）、香西軍は藤尾城周辺で最後の決戦、いよいよ落城寸前の時、天霧城主香川信景を仲介とする和議が成った。しかし、1585年（天正13）、豊臣秀吉の四国攻略に伴い佳清はついに退隠し、香西氏の歴史は終りを遂げる。

(4) 城跡の概要（第2図、

以下図1.2.3……と表示する）

紙数の都合で、地形測量図や周辺関係城跡の踏査資料を割愛した。そこで、本城跡についてのみ遺構の状況や縄張の概要を述べる。

削平地としての郭は、山頂部南の本丸跡周辺部にまとまりをもつ存り方を示し、その配置には、地形的に段差をつけた区分と他方では



第2図 城跡概略図

相互の連絡関係に配慮したところが窺える。さらに、周囲に土塁を巡し、要所に石塁（石垣）を設けたこの区域が本城跡の主要部、つまり内郭部を構成するところである。従来、この区域全体を指して本丸跡と呼称してきたが、本丸は内郭部の中心、即ち、土類が略方形に圍繞して堅固な構えを見せる平坦部（図1）こそ本丸跡にふさわしい。ここは1700~1800㎡を測り、城跡中最も広い場をもつ。北東部に幅3~4m、土塁の途切れた開口部（本丸木戸）がある。その北側、鉤形に折れる土塁の内側には井戸跡と称するものが残るが、単に掘り込んだという程度のもので壁面・底部には何の施設もなく、これを直ちに水の手と決め難い。

本丸跡の北側、土塁の喰違虎口で連絡する一画（図2）には、段差をもつ4郭が造られ、東側の2郭の縁辺に3~4段の石塁が築かれている（第4図）。その直下に本丸木戸に通じ、頂部北東向きの郭に連絡する幅1~1.5mの通路がある。通路の下方は2mほどの切岸状で、別途の区画を考えさせる。このように4郭からなる一画は本丸に接続したいわゆる二の丸的状况を呈する。

切岸状の壁面をもつ2郭（図3）の縁辺には石塁を基部にした土塁跡が残る。本丸から北側に4郭、さらに下ってこの2郭が配置されて本丸前面を防備するかたちとなる。この2郭について三の丸的な縄張上の取り扱いが可能であろう。

以上のように、本城跡の主要部には本丸を中心に二の丸、三の丸が相互に隣接し、寄りかかった形状で配置されたと見受けられ、その所在関係は梯郭式乃至は環郭式の縄張形式を示していると言えよう。

なお、本丸跡東西側の外周には細長い帯状の平坦部が存在し、ある程度の幅と帯状に外周するところから察して、帯郭としておきたい。また、本丸跡南東隅部に接して、低段の土塁が柵形状に囲む小平坦地がある。南方から本丸に迫る敵に対しての特別な構えかもしれない。そういえば、傍らに二~三段の削平地が造られ、土塁の外南西にやや下ったところの取付にも、猫の額ほどの加工部が認められる。

北東部尾根上の郭の並びは、二の丸跡と呼ばれてきたが、ここは主要部の前衛的な性格をもつ出郭として外郭部を構成するものであろう。内郭と区分されるあたりの東西側に、外幅で10mにも及ぶ掘切状の地形があって注目される。手前の3郭（図4）は加工が



第3図 三の丸跡より本丸跡土塁を望む

十分ではなく各々の段差も少ない。これより、ごく緩やかに下って先端部の5郭にとどく。最初の郭（図5）は、自然地形と見違える状況にあるが、縁辺に土塁の痕跡を伴い、明らかに

郭としての意味付けができる。興味深いのは、北端の構え（第6図）で、弧状の郭の前面に幅1m前後、高さ50～60cmの土塁跡が残存し、地形的に周囲の急崖を考慮してもなお土塁をもって防備する用意周到さが感じられる。

北東端部から西方に下る、標高318～321mの平坦状部（第7図）に至る。これまで城跡としては不明瞭であった箇所、俗に三の丸と呼んでいた。ここは、本来緩い斜面地形が肩状に張り出したところであって、人工の造成は西側部分の一画程度ではないかと見られる。西側は20m平方程度の平坦部を有し、とりわけ、西側斜面には巨石が縁辺を築くように列石をなしている。この場所は香西の海岸線から北方内海への展望に好都合だが、他方への視野はさえぎられ、特に北方への備えにのみ用を果したといえるところか。



第4図 二の丸跡東縁辺の石塁（北より）

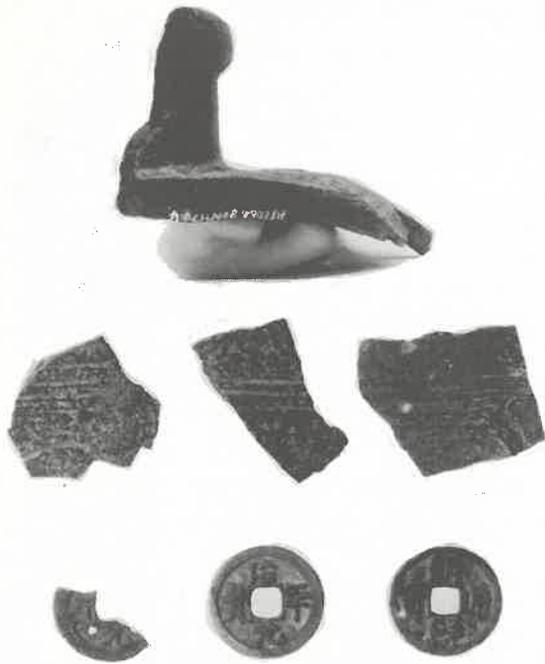
踏査で、北西に下降する標高270～280mの緩い尾根上において近接する2ヶ所の平坦状部（第8・9図）を認めた。加工部には見受けられないが、前面が深い谷地形、先の列石を備えた郭との関連性が考えられるところとして注意をひいた。

主要部における土塁の縄張について、もう少し考えてみたい。本丸跡を囲む土塁は断面梯形、上辺（^{ひらみ}）1～3m、底辺（^{しき}敷）6～7m、高さが内側で1～2m、外側において3～4mを測る。なかでも虎口（木戸）両側の構えは、ゆうに下段の郭から見上げる高さを有している（第3図）。構築にあたっては、要所で石塁を基部に据えた「腰巻石垣」状を取り入れており、盛土作業でも掘削土を版築工法によって固めたことであろう。縄張は主要部を如何にも専守防衛する形式を呈し、かなり複雑である。榊形的なもの、末端部が前後に重複する喰違（違虎口）直線的な形状に変化をつけた折れひずみ、接続する土塁に高低差をつけたところなど種々の要素が取り入れられている。それは、巧みに郭の配置に相応させ防備の最善を尽くしたもので、軍学書にいう「陰の縄張」とされるものか。

（5）本丸跡の試掘調査

試掘区は、ほぼ本丸跡の中央部に南北の並びをもたせたT字形3区画で都合128㎡の小範囲である。

発掘は一応表土下10～20cmまでの第2層精査の段階に止めたが、各区とも自然の節理をもった石や風化礫が多く、南側の区画で浅い落ち窪みや二段の掘り方による小穴を検出したほかは遺構らしいものは見られなかった。小穴については掘立て柱穴様と考えられるが、他の区画内



第5図 本丸跡試掘出土遺物

では検出されず、速断を避けたい。

遺物は表採・出土品を合わせて、備前焼、土師質土器、鉄釘、古銭などを得ている(第5図)。

備前焼壺口頸部の器形や櫛状工具を使用した直線文・直線波状文などは、おおまかに鎌倉時代後半～室町時代の、下っても中期頃までの時期が考えられる。古銭は治平元宝(北宋1064～1067年铸造)、朝鮮通宝(1423～1424年铸造)と北宋銭に属すると思われる破片の3枚であり、これらについては、輸入流通の時期幅を考慮しなければならないし、铸造年に大きな開きがあるため、特定年代を求める資料とはし難いが、室町時代の中期頃を目安にすることはどうだろうか。なお、遺物中に瓦片は1点も見当たらない。

(6) 調査のまとめ

中世山城においては、どうしても郭の縄張が

自然の山地形に制約される。それだけに、地形を最大限に利用して防備の十分を尽くすわけであるから、そこには各個独自の要素がおり込まれることになる。本城跡では、西讃の天霧城跡、西長尾城跡などと全体的に類似するところ(標高360m前後の山頂部に立地、段階状の郭の配置、要所を切通し状に遮断するなどの縄張、これは中世山城において通有の形であるが)をもちながらも、塁の縄張に極めて特徴的な性格を見出すことができ、巧緻な城構えは概観近世的ともいえる新しい要素を含んでいる。

しかし、本丸跡内の試掘調査では、鎌倉時代後半から室町時代中頃までの、即ち、おおまかに中世期中半頃にかかる遺物所見を得た。「南海治乱記」・「南海通記」(香西成資著)、「香西記」(新居直矩著)などという初代資村の承久の乱後築城には相応しないにしても、かなり年代的に遡る位置づけができそうである。おそらく、一時期の築城ではなく、必要に応じて拡張増強する経過を辿り、現在にみる縄張や造作の状況に至ったものであろう。

それにしても、本城跡では県下に他例を見ないほどの土塁・石塁遺構があり、各部所ともほとんど後世の損壊を受けておらず、当時の縄張を一貫して知ることのできる中世山城の好例であり、貴重な資料を提供するものである。

また、今回の調査では城跡全体の構造形式を正式に図化することができた。これは、讃岐の中世山城のなかでは、先年実施された天霧城跡調査に次ぐもので、今後の城郭調査や研究に及ぼす影響も決して少なくない。

昼寝城跡

所在地 大川郡長尾町前山

調査期間 昭和54年2月16日～3月1日

調査担当者 松木正美（長尾町教委）・大山真充（県教委）

(1) 調査の経過

ひるねじょう

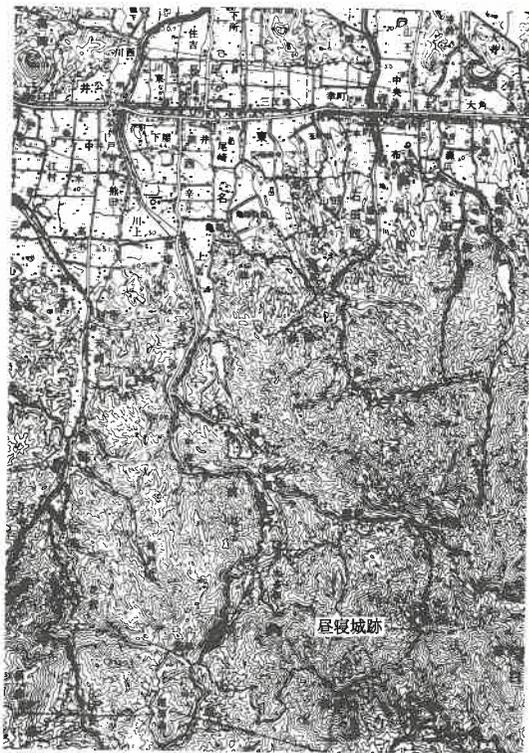
昼寝城は中世、東讃地域に勢力をもっていた土豪寒川氏の拠城である。寒川氏はこの昼寝城を本城とし、台が山城（池の内城）を里城に、東の備えとして虎丸城、与治山城を管していた（『長尾町史』）。

昼寝城跡は前山川上流の山間部、標高460mの山稜頂部の平坦地がその遺称地とされているが、縄張りや遺構の状況など不明な点が多かった。

そのため今度長尾町教育委員会が主体となり調査を実施することになった。

初年度である今回は、付近一帯の踏査を行う一方、居館跡と推定されている場所の地形測量を行った。

測量には石田高等学校農業土木科の生徒の全面的な協力が得られた。なお、54年度にも継続調査が予定されている。



第1図 昼寝城跡

(2) 遺跡の概要

城跡は長尾町の中心部より7km南の山間部に所在する。平野部からは5.5km隔っている。

今まで昼寝城跡と呼ばれてきたところは、前山川の上流の谷川と太郎兵衛館に至る溪流にはさまれた、標高460mの山稜頂部である。

そこには東西に2つの平坦地があり、西の平坦地は約100㎡の広さで、西端に「寒川社」と呼ばれる小さな祠が祭られている。一方東の平坦地はやや広く約200㎡の広さがあり、南端に高さ約50cmの土塁跡と思われる遺構が一部残っている。この箇所以外には土塁跡は認められず、平坦地の外周は急崖になっている。東平坦地のさらに東は鞍部となっており、そこには堀

切がなされている。

居館跡と推定され、今回測量の対象となった地区は、前述の山稜頂部の北北西 500 m の丘陵尾根上の平坦地である。標高は 280 ~ 300 m で、現在畑地・水田となっている。測量を行った範囲は南北 200 m、東西 60 m である。

尾根上平坦地の西側はいずれの場所も急崖になっている。尾根が延びる北側と傾斜面にあたる東側は階段状に平坦地が重なっている。最も高い位置にある平坦地は標高 296 m で現在墓地になっており、南北 14 m、東西 8 m の丸味をおびた三角形形状を呈している。この南は 1.5 m 低くなり、南北 25 m、東西 10 m の平坦地が広がっている。北は幅 1 m の細い農道が高さを減じながらのび、長さ 17 m つづき次の平坦地と連絡している。農道で低くなった地点は堀切の埋没したものかもしれない。

北の平坦地は標高 294.5 m で、南北 34 m、東西 12 m の楕円形である。こ

の平坦地の北と東は高さ 3 m の崖となっており、崖下にまた平坦地が形成されている。東側は細長い、幅 2 ~ 3 m の平坦地が南北にのび、北側では広くなり三角形になっている。三角形の先端部には円形の突出部がある。この下は再び急な崖となり約 5.5 m 落ちる。崖下にまた平坦地があり、これは幅約 12 m で上の平坦地をとり囲むように東と北側に広がっている。これよりさらに下方にも階段状に平坦地があり水田となっている。

標高 272 m の北方崖ぎわの地点に墳墓と思われる石積み群がある。水田化されていないゆるやかな傾斜地の、約 60 m² の範囲に径 0.5 ~ 1.5 m、高 30 ~ 50 cm の石盛りが 20 数基密集している。中世墳墓とみてよいだろう。

最も標高の高い平坦地の南 60 m の地点に堀切と推定される箇所がある。山稜部から高さを徐々に減じながら北へ延びてきた尾根が標高 306 m の地点で急に 4 m 落ち、北へ 7 m 行った地点で再び高さをまし標高 304 m となる。

この付近は最近の林道工事で大きく改変をうけているが、上幅約 5 m、底幅約 2 m、深さ 4 m の堀切の可能性が考えられる。



調査風景



居館跡推定地遠景

以上が昼寝城跡の簡単な概要であるが、踏査の結果、今回測量を行った地区に類似した、尾根すじを削平した平坦地が、谷川の兩岸に4ヶ所確認された。そのうちの1つの地点には「ジョウノミギ」という地名が残っている。

また4ヶ所の平坦地にはそれぞれ社が現存している。昼寝城の縄張りについてもう1度考え直してみる必要があるかもしれない。

なお、今回の調査結果が近々町教委から概要報告として発刊される予定である。 (大山)



居館跡推定地の平坦地



中世墳墓群

すべつと窯跡

所在地 綾歌郡綾南町陶字二陶1537番地

調査期間 昭和53年2月7日～2月13日

調査担当者 沢井静芳

(1) 調査の契機と周辺の遺跡

本遺跡の所在する綾歌郡綾南町は、讃岐国衙の設置された府中から、綾川を南に5km程上った地に位置する。この綾南町の北東部の陶地区は、その地名どおり、奈良～平安時代の古窯跡が数多く分布しており、陶邑古窯跡群として総称され、香川県屈指のものとして知られる。(その数約120とされる。)

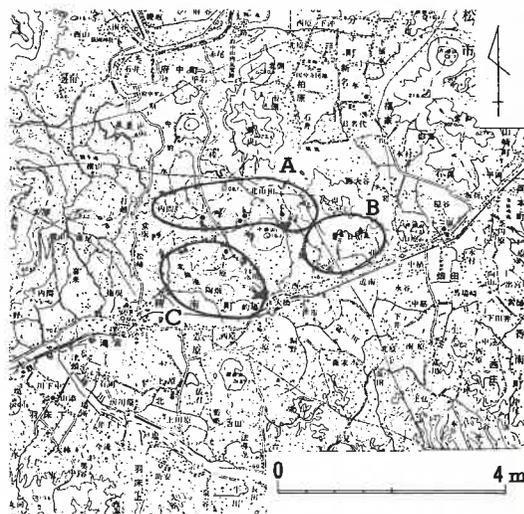
この陶一帯は洪積台地の発達が著しく、粘質土は良質の陶土を提供し、いたるところに見られる深く侵食された台地の谷斜面はかっこうの、窯構築の場をもたらした。谷は顕著なもので15mの深さに達するものもある。

窯跡の分布は、その地理・遺構の特徴により四区分がなされる。(A) 十瓶山の山麓、(B) 火の山の南麓、(C) 北条池周辺、そして町の中央を東西に走る電車の線路より南の地区である。(A)は平安時代の瓦窯を中心として、(B)は平安時代の須恵器窯、そして(C)は奈良時代の窯と、それぞれの特徴を示す。

^{注1} この陶地区において、綾南町が町道建設工事中、本遺跡が発見された。十瓶山山麓でブルドーザーにより削り取った斜面の断

周辺の遺跡一覧表

図中記号	遺跡名	図中記号	遺跡名
a	林ヶ池1号窯跡 (～2号)	i	ますえ畑瓦窯跡
b	赤瀬山1号窯跡 (～2号)	j	丸山1号窯跡 (～3号)
c	カメ焼谷1号窯跡 (～2号)	k	丸山西1号窯跡 (4号)
d	すべつと2号窯跡	l	山の上池1号窯跡 (～3号)
e	すべつと1号窯跡	m	九十原新池1号窯跡 (～3号)
f	すべつと3号窯跡 (今回調査の窯跡)	n	北条池1号瓦窯跡
g	十瓶山西1号窯跡 (～2号)	o	池宮南神社窯跡
h	庄屋池1号窯跡 (～2号)	p	庄屋原窯跡



第1図 周辺の遺跡地図

面に、幅 1.3 m の炭層が出てきたのである。この斜面の上方には、出土した須恵器（皿・杯）により平安前期とされる、県指定史跡のすべっと 1 号窯跡、東方には同 2 号窯跡がある。又、西方には平安後期に相当する六葉重弁蓮華文軒丸瓦などが出土した、やはり県指定史跡のますえ畑瓦窯跡が所在する。十瓶山の東にある火の山の西斜面の谷筋には平安～鎌倉時代にかけてカメを焼いたとされるカメ焼谷が見られる。

火の山と十瓶山の間に、北方から深く入りこんだ谷が形成されており、現在水田となっている。この谷底から、10m 余り上方の斜面に本遺跡が立地する。

(2) 遺構について

発掘調査前、観察された炭層は、その両端の暗赤褐色の焼土にはさまれ、あたかも焚口であるかの状況を示していた。灰原があったと思われる部分はすでにブルドーザーにおされて消失していた。普通、灰原から多くの遺物がでることを考えるならば、残念である。

遺構は古窯としての構造を示し、幅 1.4 m、全長 3.8 m、深さ 0.4 m を測る半地下式無段登窯である。（第 2 図のとおり）

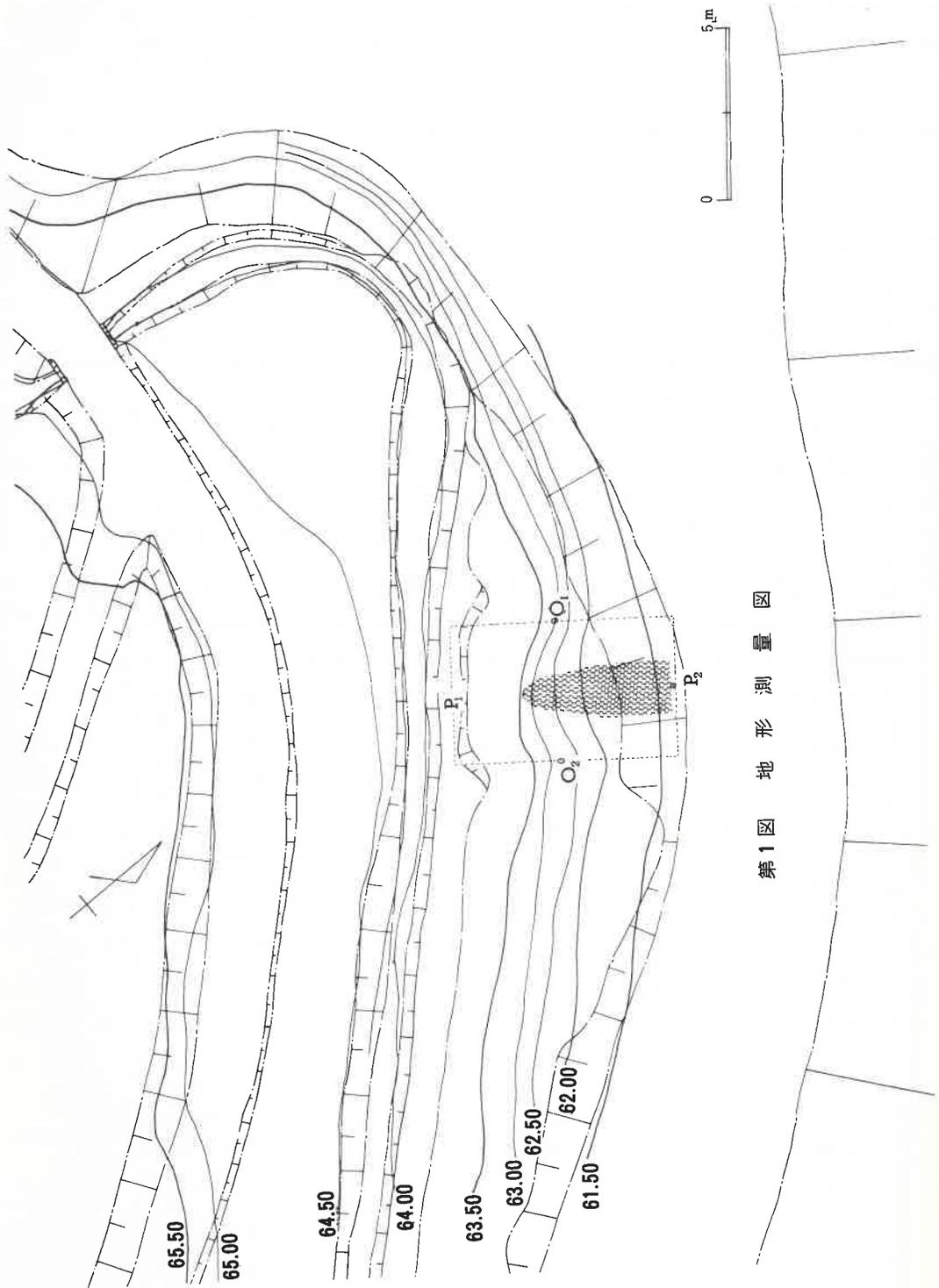
燃焼室は、19.5cm の厚さをもってクヌギなどの炭が一層をなして検出された。1.4 m の長さをもつ。焼成室と考えられる部分は、長さ 1.4 m でこの炭が極端に少なくなり、上層の浸透した土と多少の炭が混って一層をなす。煙道と思われる部分には炭は見られず、天井を構築したと思われる土の堆積が見られた。燃焼室—焼成室—煙道と考えられる各々の部位でその窯床は多少の勾配の変化を示す。燃焼室で 20°、煙道では 40° 程の上り勾配をもつ。天井の確たる跡はないが、前述のように、遺構の堆積土の状況から判断すれば第 2 図の第 3 層がこれに相当すると考えられる。

構築法について観察すると、斜面を掘りこみ、燃焼室・焼成室の部位は下層の粘質土まで掘り、煙道で勾配を上げて煙り出しを作っている。この地山整形の後、燃焼室の両端に粘土を固めて壁としている。

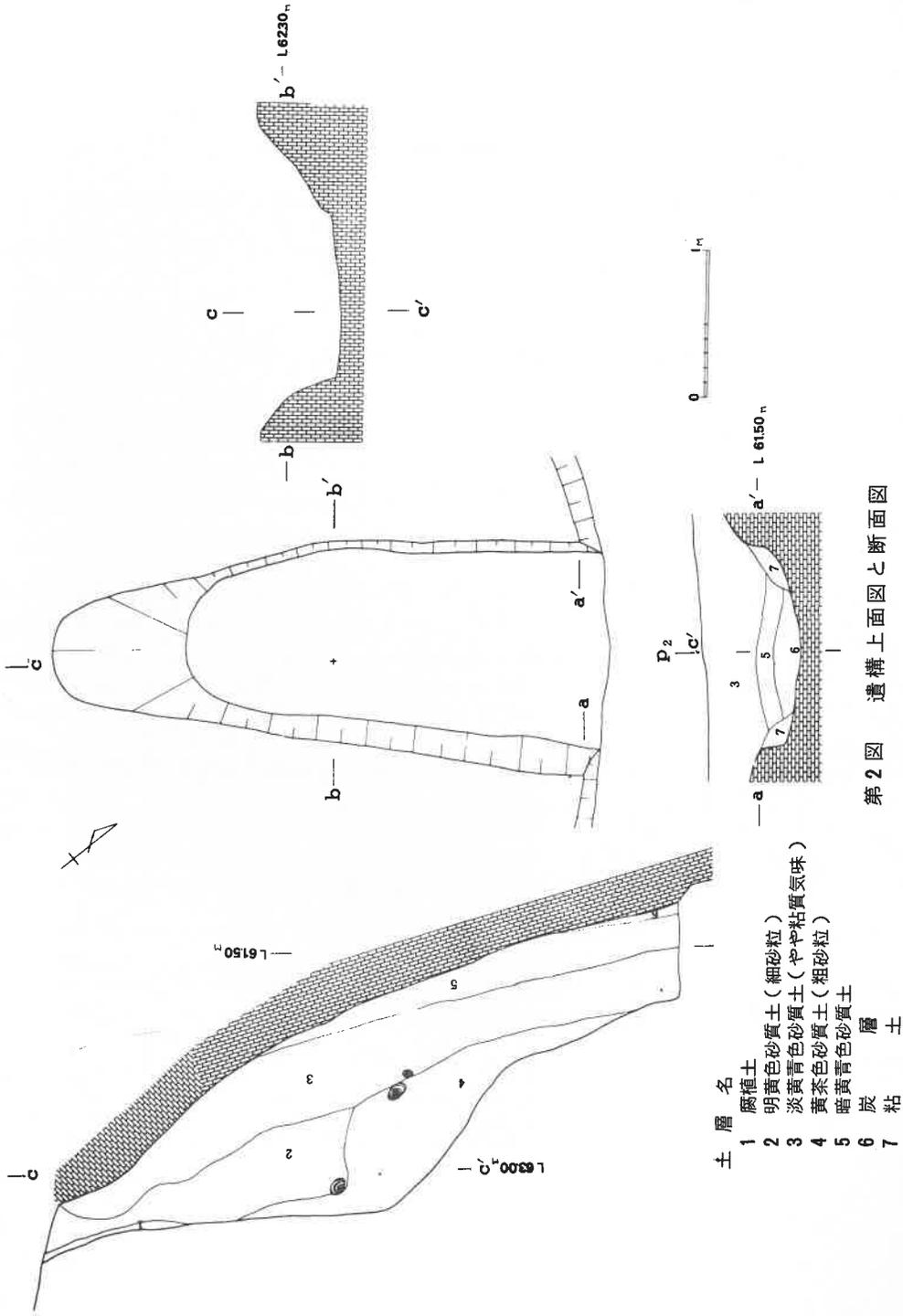
(3) 結 び

今回の調査により、窯跡としての性格を最も端的に示す遺物は検出されなかった。又、使用により焼けるであろう窯床もほとんど焼けていなかった。しかし、燃焼室に堆積した炭あるいは窯壁と考える燃焼室の粘土が焼けており、その使用の痕跡を残している。おそらく、短時日の使用の後、何らかの要因により廃棄されてしまったものと思われる。

注 1 「香川県陶邑古窯跡群調査報告」香川県教育委員会 1968.



第1图 地形测量图



第2圖 遺構上面圖之断面圖

- 土層名
- 1 腐植土
 - 2 明黃色砂質土(細砂粒)
 - 3 淡黃青色砂質土(中粘質氣味)
 - 4 黃茶色砂質土(粗砂粒)
 - 5 暗黃青色砂質土
 - 6 炭層
 - 7 粘土



(1)



(2)

(1) 遺構の南上方に十瓶山を見る。
(2) 遺構を下より見る。

落 合 遺 跡

所在地 大川郡大内町落合 701 番地, 706 番地

調査期間 昭和53年 4月～9月 (分布調査)

調査担当者 六車 功

(1) 調査の経過

おちあい
落合遺跡は大川郡大内町落合で行われた農業基盤整備事業がきっかけで発見された遺跡である。落合遺跡の周辺には、南の鷲が山(77m)から大内平野に向かって突き出した比高約5mの舌状微高地が幾枝にも発達している。これらの微高地にはさまれた中央の低地は昔から極めて水分の多い湿地であった。また、まわりの微高地も等高線に沿って幅5m足らずの曲折した田や畑が耕やされて来た。

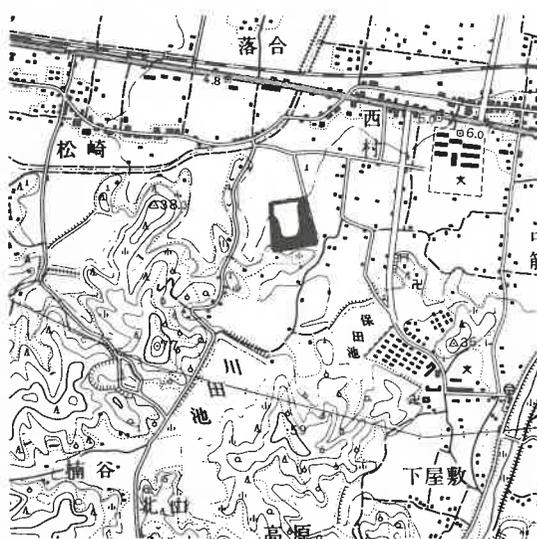
昭和52年8月、農業の近代化を図るために、土壌の改良と耕地整理を兼ねて、重機が湿地の土砂を掘削していたところ地表下3mの黒色粘質土の中から壺、甕、鉢などの土器、サヌカイトや緑泥片岩製の石器、加工痕のある木片が発見された。このような遺物は、その後も掘りおこされた土の中から丹念に採集されて翌年3月には約600点を数えるほどになった。

地権者の六車 正氏から大内町教育委員会、大内町文化財保護協会会長宮川真明氏を通じて遺物発見の報告と調査の依頼があり、香川県教育委員会では遺跡の概要を把握するために分布調査を実施した。

(2) 遺跡の概要

落合遺跡は、国道11号線と番屋川が交わる一本松橋の南約0.5kmに位置し、U字形に展開する比高約5mの二つの舌状微高地とこれらに挟まれた低湿地から構成されている。周辺には同様の地形が南から北の大内平野に向かって幾枝にも発達しており遺跡の範囲がさらに拡大する可能性を秘めている。

落合遺跡から南約2kmにある与田川中流域の微高地には、磨製石斧や祭祀用土器の出土した



落合遺跡位置図 1:25000
(中央の黒い部分は遺物の出土範囲を示す)

鳶谷遺跡、風呂遺跡、大社遺跡などが知られ、弥生時代中期から後期の遺跡として誉水村史に紹介されている。また南東2kmにある原間池の周辺には、弥生時代の遺物散布地や刳抜式石枕付割竹形石棺や埴輪片の出土が伝えられる大日山前方後円墳、後期の盛土円墳で片袖式横穴石室の原形をよくとどめる原間古墳、奈良時代の法陸寺系瓦を出土した白鳥廃寺、平安時代後期に創建され、戦国時代に長宗我部軍の兵火で焼失したと伝えられる高松廃寺など大内郡の歴史を語るいくつもの文化財が知られている。落合遺跡は、これらの文化財に先駆的位置を占める重要な遺跡であるといえよう。

(3) 遺構について

落合遺跡では遺構は確認されていないが、①遺物を含む黒色粘質土中には、炭や灰が濃密に含まれる部分があった。②掘りおこされた土塊の中に柱穴らしい土層の断面が認められた。③遺物の分布状態。④遺跡の立地条件などから考えて遺構を伴う可能性が極めて高いと考えられる。

(4) 遺物の出土状況

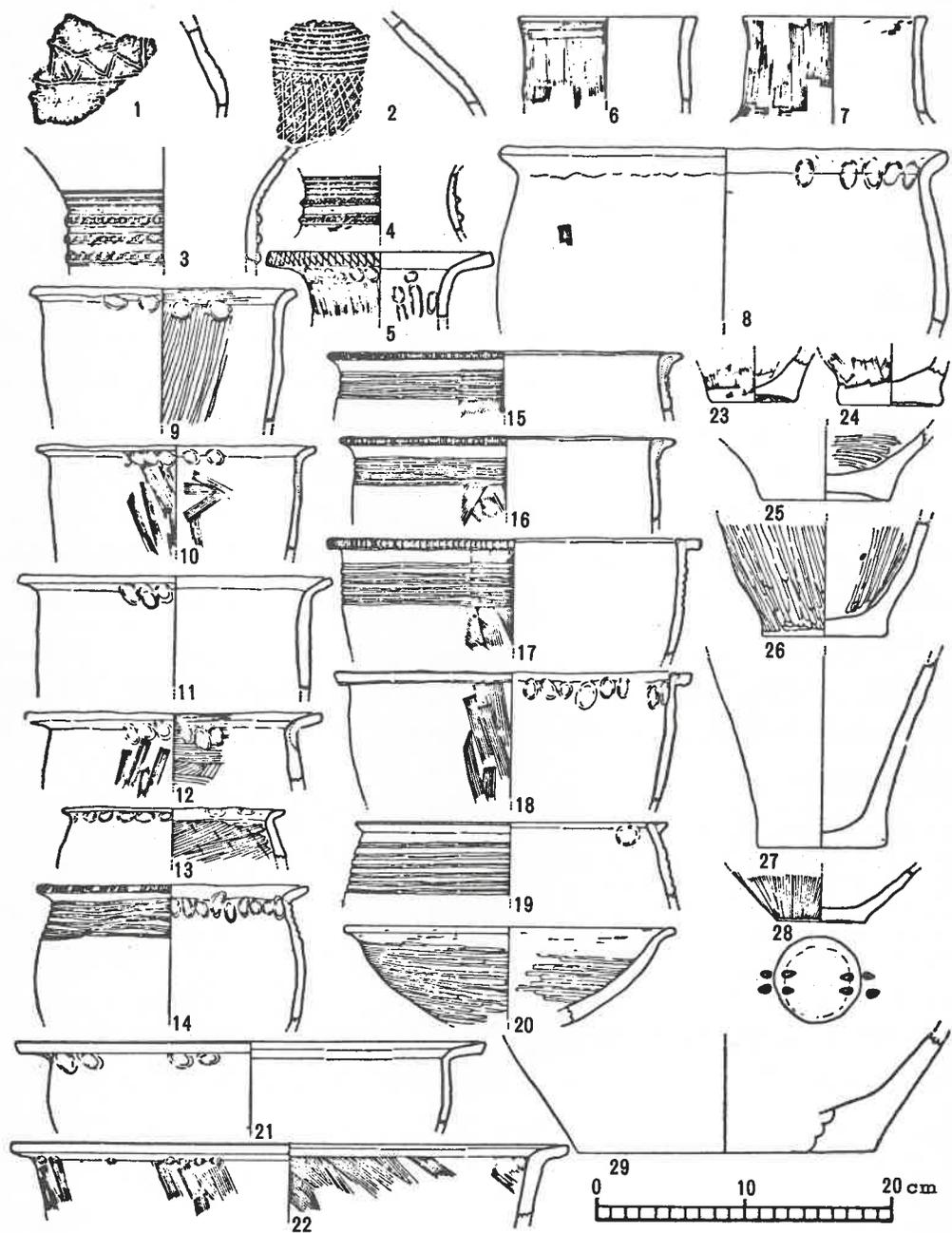
落合遺跡の遺物はすべて掘り穴の排土の中から採集されているために遺物間相互の時間的な差は明らかでない。このことについては後ほど他の遺跡の遺物との比較から明らかにしていきたい。ただ遺物の分布は、ほぼ舌状微高地の裾に沿って、これより高い範囲に限られ、中央の低湿地や微高地の北端部以北には分布しないと考えられる。

(5) 主たる遺物

落合遺跡出土遺物の中からここでは29点を紹介したい。1～7は壺である。1、2は肩の部分で、1には篋磨きをかけた上から鋸歯文が、2には沈線文と斜格子文がともに篋で刻まれている。3、4は頸の部分で、指頭圧痕による刻み目のついた貼付凸帯文、および篋描沈線文が刻まれている。5～7は口縁部で、8～19はいずれも甕の口縁から胴の部分であるが、口縁部の断面が「ゆるいくの字状(如意状)」を呈するタイプ(8～14)、と「逆L字状」を呈するタイプ(15～19)に大別でき、さらに口縁端部に刻み目、胴上半部に篋描沈線文を持つものと持たないものとに細分類できる。また8、13、14、19を除く甕は口縁部に18～25cmの最大径を測る。20～22は鉢、23～29は土器の底である。26には内外面共に篋磨きをかけられ、内面には長さ7mm、幅2mmの糊痕が明瞭に残っている。これは大内町の米づくりを語るものとして注目される。また28は、外面に篋磨きをかけ底の肉の部分には焼成前から5～6mm大の穴を貫通させている。ここでは一応、土器の底として扱っているが、蓋の可能性もある。これらのほかに石器が数点あるが、土器の詳しい説明と石器の内容については稿を改めたい。

(6) 遺跡の性格

これまでに県内で確認された弥生時代前期の遺跡は、県内最古の観音寺市室本遺跡をはじめ綾歌町行末遺跡、多度津町三井遺跡、善通寺市五条遺跡など10余カ所を数えるにすぎない。東讃では高松市に天満弥生式遺跡、池田町村井遺跡が、三木町に香川大学農学部構内遺跡が知られ



落合遺跡出土土器実測図

ているだけで大川郡内では初めての発見である。

次に落合遺跡の時期について、壺と比較的個体数の多かった甕を手がかりに考えてみたい。

「ゆるいくの字状口縁（如意状口縁）」をタイプA、「逆L字状口縁」をタイプBとして、口

縁端部に刻み目を持ち胴上半部に篋描沈線文を持つものを a, 口縁端部に刻み目を持つが胴上半部には篋描沈線文を持たないものを b, 口縁端部に刻み目を持たないが胴上半部には篋描沈線文を持つものを c, 口縁端部に刻み目を持たず胴上半部にも篋描沈線文を持たないものを d とすれば, Aa, Ab, Ac, Ad, Ba, Bb, Bc, Bd の組合わせが考えられる。まずタイプ A に入る遺物は, 行末に Aa, Ab, Ac, Ad, 三井 I に Aa, Ac がみられるが, この時期より古い室本, この時期より新しい三井 II, 五条 II にはみられない。ただし室本の遺物は壺だけに限られるので, 落合遺跡の壺と比較すれば, 室本は, 落合の壺にみられる「貼付凸帯文」よりも二段階ほど先行する「段」の時期にあたる。

タイプ B に入る遺物は, 三井 II に Ba, Bc, 五条 II に Ba, Bb, Bc, および五条 II と III の中間形態と分類されたものに Bd がみられるが, これより古い行末, 三井 I, これより新しく弥生時代中期初頭に比定される櫛描文の五条 III にはみられない。

従って落合遺跡は室本遺跡より新しく, 行末遺跡, 三井遺跡および五条遺跡の II の時期に並行し, 五条遺跡の III の時期よりは古い弥生時代前期末に比定できる遺跡といえる。また, 落合遺跡の発見は大内町の歴史の上限を進めただけでなく史料も少なく不明な点の多い弥生時代前期の瀬戸内に生きた人々の生活や交流範囲を知る上で大変貴重な情報を提供したといえる。

(7) おわりに

落合遺跡については, 香川県教育委員会発行の「教育香川」昭和53年12月号と, 大内町文化財保護協会発行の「文化財おおち」第8号にも同じ内容を易しく解説した報告文が掲載されています。(六車)

香川県埋蔵文化財調査年報

昭和54年3月31日

編集 香川県教育委員会
発行

印刷 株式会社 美巧社